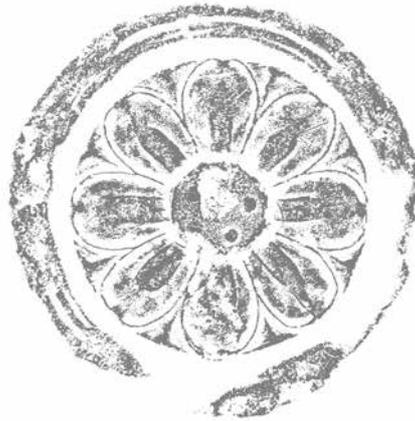


桜 井 市

平成13年度国庫補助による
発掘調査報告書



2002. 3. 31

桜井市教育委員会

桜 井 市

平成13年度国庫補助による
発掘調査報告書

2002. 3. 31

桜井市教育委員会

序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約3割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南には茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺跡、上之宮遺跡、大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く分布しています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは平成13年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち大藤原京関連遺跡、吉備池遺跡、山田寺跡、茅原遺跡、東新堂遺跡、纏向遺跡、朝倉遺跡、三輪遺跡、上之宮遺跡、吉備遺跡の調査報告であります。

現地調査にあたりましては指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、酷暑・厳寒のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力頂いた整理員の方々に深くご厚礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資する所となれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成14年3月31日

桜井市教育委員会

教育長 石井和典

例 言

1. 本書は平成13年度国庫補助事業として奈良県桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の範囲確認調査の報告書である。本報告所収の調査は吉備池遺跡第12次調査と纏向遺跡第127次調査が重要遺跡範囲確認調査であった以外はいずれも個人住宅・農業用倉庫建築に伴うものであり、纏向遺跡第123・124・127次（松浦宏和氏・森岡忠雄氏・寫岡一郎氏）、大藤原京関連遺跡第36次（鎌房勝美・森下八重野・川谷一寿氏）、山田寺跡第12次（岩本龍一氏）、東新堂遺跡第8次（森康清氏）、吉備池遺跡第12次（日生ハウジング）、朝倉遺跡第4次（赤松慎一氏）、三輪遺跡第19次（池田幸重郎氏）、吉備遺跡第14次（脇本聖二氏）、上之宮遺跡第14次（吉田忠司氏）、茅原遺跡第11次（松出正伸氏）と、圃場整備事業に伴う磐余遺跡群の調査との計14箇所の発掘調査を行っている。
2. 調査主体：桜井市教育委員会事務局
教育長 石井和典、事務局長 小山剛、社会教育課長 山添慶司
社会教育課主幹 萩原儀征、清水眞一、文化財係主査 堀尾えい
技師 橋本輝彦、松宮昌樹、臨時職員 村上薫史、小畑佳子
3. 調査担当者：橋本輝彦、松宮昌樹、村上薫史、小畑佳子
4. 調査補助員：安井隆浩（新潟大学OB）、豊福恵子（奈良大学OG）、後藤浩之（奈良大学大学院）、萩原良子（早稲田大学OG）、堂浦千景（仏教大学）、中村真理
5. 調査作業員：植田光雄、佐野圭造、嶋岡辰雄、井上久幹、上田猛、植西キヨ、辻カズ子、吉井利和、高松善一、田仲啓治、高奥久子、高奥恵子、中西智子、谷島昂
6. 整理作業及び報告作成：萩原良子、栢田巳容子、嶋岡由美、阪本美鈴、河村廣子、中村真理、奥田佳代子、長野千秋、堂浦千景、安井隆浩、豊福恵子、後藤浩之
7. 執筆者：本書の執筆は各担当者が執筆し、文末に明記している。なお、編集は橋本が行った。
8. 本書所収の報告のうち、吉備池遺跡第12次調査については整理期間も短く、その成果を十分に盛り込む事ができなかった。これらについては別途に報告書を作成する予定であり、本書所収のものはあくまでも調査概報であることをお断りしておく。
9. 出土遺物をはじめ調査記録一切は桜井市教育委員会において保管している。活用されたい。

目 次

序

例言

目次

第1章	平成13年度の国庫補助による発掘調査	1
第2章	東新堂遺跡第8次発掘調査報告	2
第3章	大藤原京関連遺跡第36次調査報告	9
第4章	朝倉遺跡第4次発掘調査報告	11
第5章	吉備池遺跡第12次発掘調査概要報告	13
第6章	纏向遺跡第123次発掘調査報告	17
第7章	三輪遺跡第19次発掘調査報告	19
第8章	纏向遺跡第124次発掘調査報告	23
第9章	吉備遺跡第14次発掘調査報告	25
第10章	上之宮遺跡第14次発掘調査報告	27
第11章	茅原遺跡第11次発掘調査報告	29
第12章	山田寺跡第12次発掘調査報告	31
第13章	纏向遺跡第127次発掘調査報告	35
付載1	新屋敷出土の古式土師器について	40
付載2	旧桜井市立図書館収蔵の瓦について	42

挿 図 目 次

図1	平成13年度国庫補助事業による 発掘調査位置図 (1/50,000) …… 1	図27	調査区平・断面図 (1/80) ……24
図2	東新堂遺跡第8次調査地位置図 (1/5,000) … 2	図28	出土遺物実測図 (1/3) ……24
図3	土層断面図 (1/100) …… 3	図29	吉備遺跡第14次調査地位置図 (1/5,000) ……25
図4	調査区全体図 (1/400) …… 4	図30	調査区平・断面図 (1/100) ……26
図5	遺構平面図 (1/100) …… 5	図31	上之宮遺跡第14次調査地位置図 (1/5,000) …27
図6	土壙墓SX1001実測図 (1/40) …… 6	図32	調査区平・断面図 (1/100) ……28
図7	土壙墓SX1001出土遺物実測図 (1/4) …… 7	図33	茅原遺跡第11次調査地位置図 (1/2,500) ……29
図8	出土遺物実測図 (1/2・1/4) …… 8	図34	包含層出土土器実測図 (1/4) ……30
図9	石製品実測図 (1/2) …… 8	図35	調査区平・断面図 (1/60) ……30
図10	トレンチ位置図 (1/2,500) …… 9	図36	山田寺第12次調査地位置図 (1/5,000) ……31
図11	調査区平・断面図 (1/80) ……10	図37	調査区平・断面図 (1/40) ……32
図12	朝倉遺跡第4次調査地位置図 (1/5,000) ……11	図38	SP-1001断面図 (1/40) ……33
図13	調査区平・断面図 (1/80) ……12	図39	出土遺物実測図 (1/3) ……34
図14	吉備池遺跡第12次調査地位置図 (1/2,000) …14	図40	纏向遺跡第127次調査地位置図 (1/5,000) …35
図15	調査区平・断面図 (1/160) ……15	図41	調査区平・断面図 (1/80) ……36
図16	北溝平・立面図 (1/40) ……15	図42	SX-1001出土土器実測図 (1/4) ……37
図17	南溝平面図 (1/40) ……15	図43	墳丘復元案 (1/800) ……37
図18	調査地と確認された伽藍 (1/2,000) ……16	図44	ホケノ山古墳と巻野内石塚古墳との 墳丘比較 ……38
図19	纏向遺跡第123次調査地位置図 (1/5,000) …17	図45	巻野内石塚古墳墳丘図 (1/500) ……39
図20	調査区平・断面図 (1/100) ……18	図46	出土地位置図 (1/5,000) ……40
図21	三輪遺跡第19次調査地位置図 (1/5,000) ……19	図47	出土遺物実測図 (1/4) ……41
図22	調査区平・断面図 (1/80) ……20	図48	旧図書館収蔵瓦実測図(1) 1 : 3 ……42
図23	石製品実測図 (1/2) ……21	図49	旧図書館収蔵瓦実測図(2) 1 : 3 ……43
図24	出土遺物実測図 (1/4) ……21	図50	旧図書館収蔵瓦実測図(3) 1 : 3 ……44
図25	三輪城周辺の地形と調査地 (1/1,000) ……22	図51	旧図書館収蔵瓦実測図(4) 1 : 3 ……45
図26	纏向遺跡第124次調査地位置図 (1/2,500) …23		

図 版 目 次

東新堂遺跡第8次調査

- 図版1 東新堂遺跡第8次調査(1)
調査地全景-1(南より)
調査地全景-2(南より)
- 図版2 東新堂遺跡第8次調査(2)
調査地全景-3(南より)
土壙墓SK-1001(北より)
- 図版3 東新堂遺跡第8次調査(3)
西壁断面(東より)
西壁断面(南東より)
- 図版4 東新堂遺跡第8次調査(4)
土壙墓SX-1001出土遺物

大藤原京関連遺跡第36次調査

- 図版5 大藤原京関連遺跡第36次調査
第1面全景(北より)
第2面全景(北より)

吉備池遺跡第12次調査

- 図版6 吉備池遺跡第12次調査(1)
調査地全景(南より)
トレンチ全景(右が北)
- 図版7 吉備池遺跡第12次調査(2)
トレンチ全景(北より)
トレンチ全景(南より)
- 図版8 吉備池遺跡第12次調査(3)
北面雨落溝(西より)
南面雨落溝(東より)
- 図版9 吉備池遺跡第12次調査(4)
南門全景(南東より)
基壇状の高まり(東南より)

纏向遺跡第123次調査

- 図版10 纏向遺跡第123次調査
調査地全景(西より)
北壁断面(南より)

三輪遺跡第19次調査

- 図版11 三輪遺跡第19次調査(1)
調査地全景-1(西より)
調査地全景-2(東南より)
- 図版12 三輪遺跡第19次調査(2)
SD-1001南壁断面
出土遺物

纏向遺跡第124次調査

- 図版13 纏向遺跡第124次調査(1)
調査地全景(西より)
調査地全景(東より)
- 図版14 纏向遺跡第124次調査(2)
SX-1001全景(南西より)
出土遺物

吉備遺跡第14次調査

- 図版15 吉備遺跡第14次調査
調査地全景(西より)
北壁断面(南東より)

茅原遺跡第11次調査

- 図版16 茅原遺跡第11次調査
調査地全景(東より)
下層探査トレンチ(南より)

山田寺跡第12次調査

- 図版17 山田寺跡第12次調査(1)
調査地全景(東北より)
調査地全景(東より)
- 図版18 山田寺跡第12次調査(2)
調査地全景(西より)
西壁断面
- 図版19 山田寺跡第12次調査(3)
SP-1001(西より)
出土遺物

纏向遺跡第127次調査

- 図版20 纏向遺跡第127次調査(1)
調査地と巻野内石塚古墳(下が北)
調査地と巻野内石塚古墳(右が北)
- 図版21 纏向遺跡第127次調査(2)
調査地全景(右が北)
調査地全景(南より)
- 図版22 纏向遺跡第127次調査(3)
SX-1001全景(東北より)
出土遺物

新屋敷土器出土地

- 図版23 新屋敷土器出土地
出土地遠景(北西より)
出土遺物

第1章 平成13年度の国庫補助による発掘調査

I. はじめに

平成13年度は14件の国庫補助による発掘調査を実施している。詳細は表1のとおり、調査原因は磐余遺跡群が圃場整備に伴う確認調査であったのと、纏向遺跡第127次調査と吉備池廃寺第12次調査が範囲確認調査であった以外はいずれも個人住宅・農業用倉庫建築に伴うものであった。(図1)

NO	調査名称	所在地	期間	面積 (㎡)	主たる遺構・遺物	担当
1	東新堂遺跡第8次	東新堂356-1番地	4月23日～5月18日	136	掘立柱建物	小畑
2	大藤原京関連遺跡第36次	橋本91-2番地	5月28日～6月1日	31	なし	松宮
3	大藤原京関連遺跡第37次	西之宮277-3番地他	6月7日～6月11日	40	なし	村上
4	朝倉遺跡第4次	黒崎620-3番地	6月15日	3	なし	小畑
5	磐余遺跡群第4次	池之内771-1番地他	7月9日～3月31日	3,230	古墳・掘立柱建物	村上・松宮
6	吉備池遺跡第12次	橋本51-1番地他	7月11日～7月24日	125	基壇・雨落溝	橋本
7	纏向遺跡第123次	箸中935-3番地他	7月30日～8月3日	14	溝・落ち込み	小畑
8	三輪遺跡第19次	三輪159-1番地他	8月23日～8月29日	40	中世三輪城	小畑
9	纏向遺跡第124次	東田198-1番地	9月17日～9月20日	25	後期古墳周濠	橋本
10	吉備遺跡第14次	吉備369-3番地	9月21日～9月27日	30	なし	小畑
11	上之宮遺跡第14次	上之宮391番地	10月2日～10月3日	13	なし	小畑
12	茅原遺跡第11次	芝1158-1番地	2月25日～2月26日	22	古墳後期落ち込み	橋本
13	山田寺跡第12次	山田1320-3番地	2月12日～2月15日	7	建物・雨落溝	橋本
14	纏向遺跡第127次	巻野内93番地	3月5日～3月19日	80	古墳後期落ち込み	橋本

表1 平成13年度国庫補助による発掘調査一覧

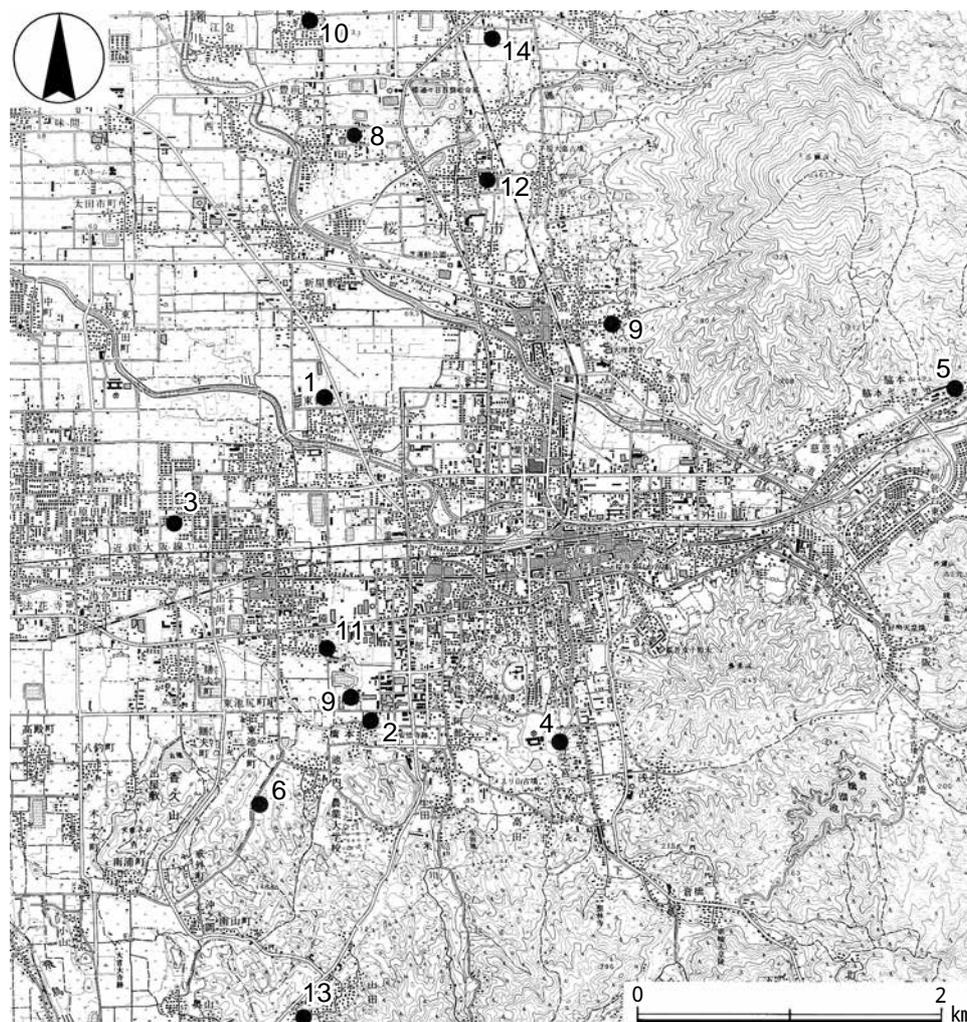


図1 平成13年度国庫補助事業による発掘調査位置図 (1/50,000)

第2章 東新堂遺跡第8次発掘調査報告

I. はじめに

今回の調査は、個人住宅建設に伴い平成13年4月23日から平成13年5月18日まで実施した。調査地は、昭和15年に厚芝保一氏が発表した「大福村新屋敷付近の弥生式遺跡」で弥生時代前期の遺跡として周知され、近年の調査により縄文時代～平安時代などの遺構が確認されつつある東新堂遺跡の東端に位置する¹⁾。また大藤原京の範囲にも含まれており、条坊復原案では敷地のほぼ中央が北五条条間小路の推定位置にあっている(図2)。

調査では、まず地内の状況を把握するために幅1mの試掘トレンチを設定し、北から掘削を開始した。南北約53mにわたる試掘の結果、南半14m分に遺構が集中して残存することが明らかになったため、その部分を拡張し調査を進めることとした。また、ベース層以下の堆積状況を把握する目的で、一部断割を行った。なお、調査面積は136㎡である。

II. 基本層序

調査地は直前まで水田として利用されていたこともあり、目立った攪乱等はなく水平な堆積状況が認められた。地内の土層は基本的に6層に大別される。1. 明青灰色土(図3第1層)、2. 淡褐色土(第2層)、3. 暗灰茶色粘質土～黄灰色粘質土(第7～9層)、4. 灰褐色砂質土(第13層)、5. 暗灰色砂混り粘質土(第16層)、6. 淡緑灰色粘土(第17層)。このうち上部2層は現代～近世にかけての耕作土で、地表から深さ40cmまで堆積する。第7～9層は、暗灰茶色～黄灰色を呈する一連の堆積層である。当層上面で中世素掘溝が検出される。第13・16層は砂質土～砂を主体とするもので、西に向っ

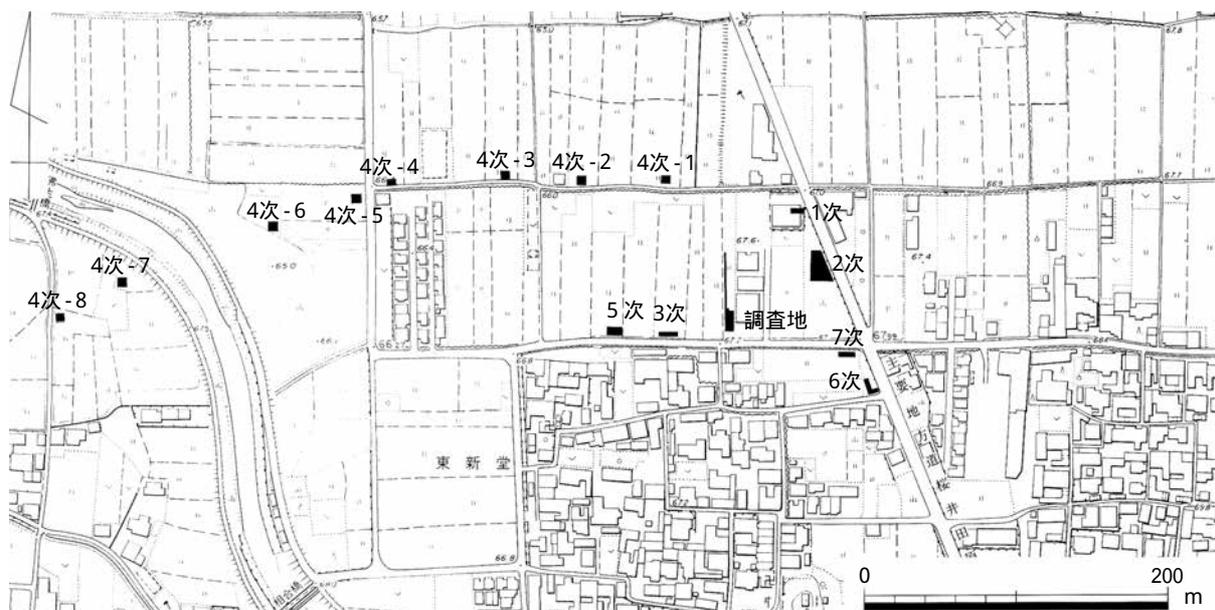


図2 東新堂遺跡第8次調査地位置図(1/5,000)

て厚みを増す傾向にあることから東からの洪水堆積層と思われる。第17層は、当地のベースとなるものである。寺川流域に形成された沖積層と考えられ、部分的に湧水を伴った。調査では、バックホーにより第1・2層を除去し、以下の掘り下げは人力を動員して作業を進めた。

Ⅲ. 検出遺構

遺構は、第7～9層と第13層、第16層上面で検出された。以下、上から第1面、第2面、第3面と呼称し説明することとする。まず第1面では、南北方向の素掘溝が計6条検出された。溝の規模はいずれも幅40cm、深さ30cmを測る。

第2面では、土壙墓、掘立柱建物、柵、溝、落ち込み、柱穴などが検出された。

土壙墓SX-1001 (図6・図版2)

調査区北西端で検出された、掘形隅円長方形を呈する南北主軸の土壙墓である。規模は東西1.3m×南北3.5mを測る。また深さは35cmで、断面は逆台形を呈する。埋土は上から淡茶灰色砂質土、黒灰色砂質土(炭混り)、淡灰色粘土、灰色粘質土(砂混り)の順で4層堆積する。遺物は、遺構検出段階から底まで連綿と出土しており、現位置を保つものは認められない。完形もしくはそれに近い状態の土師器皿、瓦器椀が多数埋納されている。また、埋土に炭化した木片が多く含まれるが、墓壙壁面に火を受けた痕跡が見られないことから火葬とは考え難いが、当地で火を伴う何らかの葬送儀礼が行なわれているものと思われる。なお所属時期は出土遺物から12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。また南小口の方が北に比して幅広なことや、枕石と思われる人頭大の石が南小口底面に設置されている

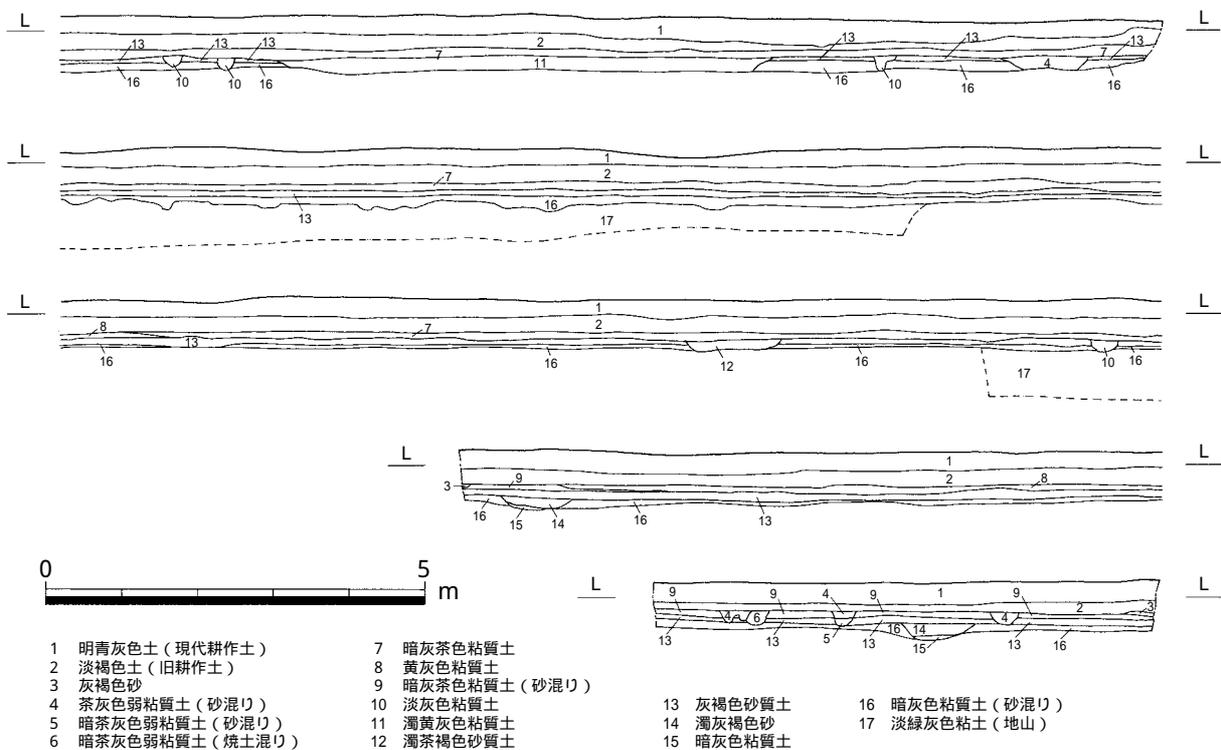


図3 土層断面図 (1/100)

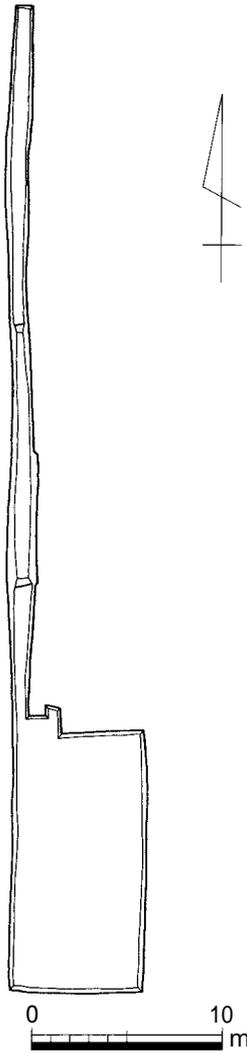


図4 調査区全体図
(1/400)

こと、遺物が南に集中することなどを踏まえ、頭位方向は南になるものと考えられる。

柵SA-1031 (図5・図版1)

調査区西半に位置するもので、南北2間分が確認された。柱穴3基のうち両隅の2基は掘形隅円方形を呈するもので、一辺70cmを測る。また南端のP3では直径30cmの柱抜き痕が検出された。中央のP2は直径40cmの円形掘形で、深さは40cmである。3基の柱穴のうち、P2・3の底面で10~20cm大の石が数個確認されており、これらは柱の沈下予防のために埋設された石材と思われる。なお当柱列は、柱穴規模から掘立柱建物の可能性が十分考えられるものである。

掘立柱建物SB-1032 (図5・図版1)

調査区内で南北6間、東西2間以上が検出され、さらに西へ広がると考えられる建物である。個々の柱穴掘形は概ね直径40cmの円形で、深さ20~30cmを測る。柱間寸法は、東辺では隅から1間分が約1m、他は2.3m等間。北辺は1間3.2m、南辺は2m等間である。

第3面では溝3条、落ち込みが検出された。

溝SD-1025 (図5・図版2)

調査区北東に位置する溝で、幅は約50cm、深さは20cmを測る。東壁より4.5mで収束している。

溝SD-1026 (図5・図版2)

南西隅で検出された弧を描きながら曲がる溝である。全容はわからないが現状で3m分確認され、溝幅70cm、深さ20cmである。

溝SD-1029 (図5・図版2)

調査区中央に位置する、SD-1025と同一方位の溝である。東壁より6.5m分検出され、その部分についての幅は40cm、深さは10cmを測る。

落ち込みSX-1027 (図5・図版2)

SX-1001南脇に位置する遺構である。平面不定長方形の土坑に溝状の落ち込みが付随している。規模は東西2.5m、南北1mを測る。

IV. 出土遺物

主な出土遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、瓦器、石庖丁などがあり、遺物整理箱に換算して7箱分出土した。出土地点別では土壙墓SX-1001が最も多く、全体の約半数を占める。前述の通り土師器皿、瓦器椀など中世遺物が一括して出土した。第13層では平安時代後期~鎌倉時代初頭の土器に加え、飛鳥時代の遺物も含まれる。また第16層には縄文時代後期~弥生時代後期にかけての遺物が包

含されていた。以下、まずは遺構に伴う資料について述べた後、包含層等出土遺物に関しては時代の古いものから順に説明したい。

土壌墓SX-1001出土遺物（図7-1~41・図版4-1~10）

1~16は瓦器椀、17は瓦器皿、18~41が土師器皿である。

まず、瓦器椀は概ね口径15~16cm、器高5.5~6cmを測るものである。椀部は丸味を帯ながら立ち上がるものが大半だが、11のように直線的なものもある。高台は、全体的には断面が三角形に退化しているが、2・13のような台形を呈するものも未だ認められる。成形・調整手法は均一で、外面には口縁部を中心にヘラミガキが施され、下半には成形時の指頭圧痕が残存している。内面には1cmあたり

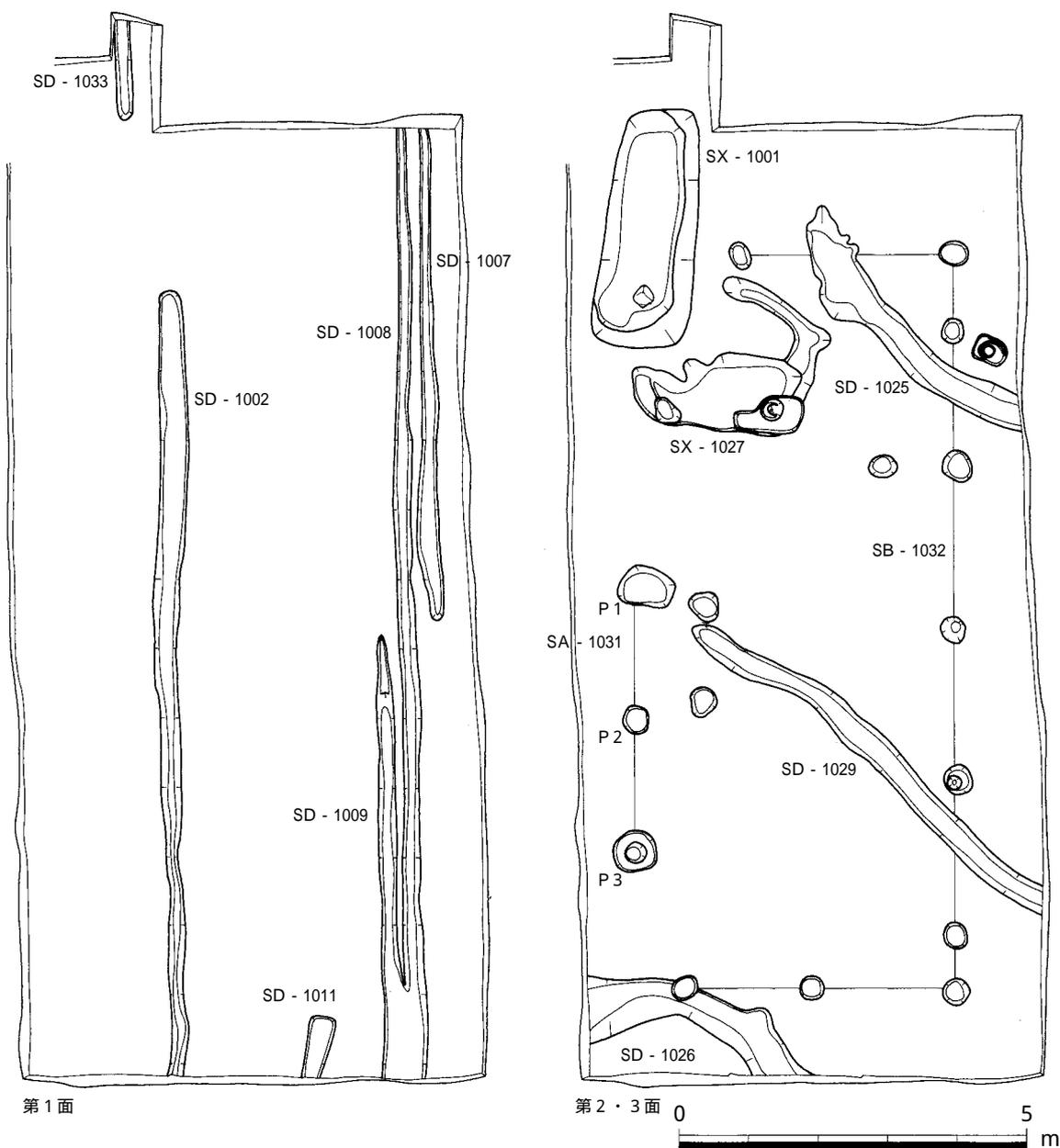


図5 遺構平面図 (1/100)

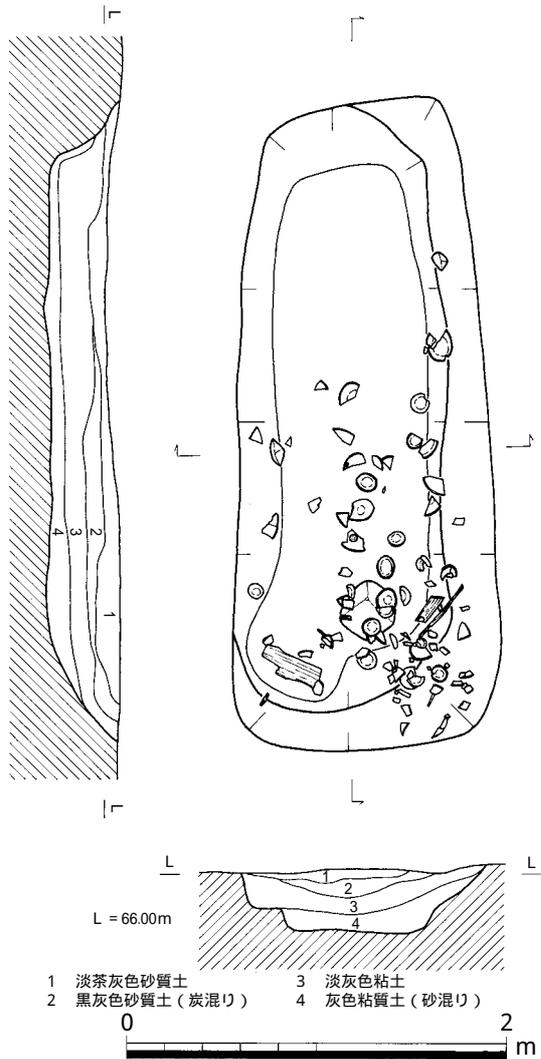


図6 土壙墓SX1001実測図 (1/40)

10条以上の緻密なヘラミガキがなされ、見込みには4～8回転の螺旋状暗文が見られる。また口縁端部には沈線が巡らされている。

瓦器の小皿は口径9.5cm、器高1.9cm、口縁1/2残存する破片である。口縁部から内面はナデ調整されるが、底部は未調整で成形時の指頭圧痕が認められる。また内面の見込みにはジグザグ状の暗文が認められる。

土師器皿は法量の面から、口径15cm前後のもの(18～22)と、口径10cm前後の小皿(23～41)に大別される。いずれも口縁部から内面には丁寧なナデ調整がなされるが、底部は未調整のまま残している。これらは良好な一括資料として捉えることができ、その所属時期は12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。

溝SD-1002出土遺物 (図8-48)

図化できたのは48の土師器小皿1点で、法量は口径9.8cm、器高1.6cmを測る。SX-1001出土資料と比べ扁平化が進んでおり、13世紀代の所産であると思われる。

第13層出土遺物 (図8-43、47)

縄文土器(43)、弥生土器(47)がある。まず43は深鉢の口縁部片であるが、摩滅が著しく時期等特定できない。47は弥生V様式期の甕ないしは鉢の底部片である。外面には明瞭なタタキ目が認められる。

第16層出土遺物 (図8-42、44～46・図9-49)

縄文土器(42)、弥生土器(44～46)、石庖丁(49)が確認された。まず42は、縄文土器深鉢の口縁部片である。外面に沈線文と磨消縄文が施される後期前葉の遺物で北白川上層式に比定されるものである。49は流紋岩を石材とする石庖丁で、両面穿孔による穴が穿たれている。

V. まとめ

今回の調査では3面の遺構面が検出され、溝、土壙墓、掘立柱建物、柵など、平安時代末～鎌倉時代を中心とする成果を挙げる事ができた。また洪水堆積層と考えられる第16層から縄文時代後期～弥生時代にかけての遺物が出土したことは、周辺地域における遺構分布を検討する上で有益な資料となるだろう。なお、当初予想されていた大藤原京の条坊道路に関する遺構は検出されなかった。当地

に洪水堆積層が比較的厚く認められることや、中世以降恒常的に水田耕作がなされた状況などから、すでに削平され残存していないものと推察される。 (小畑)

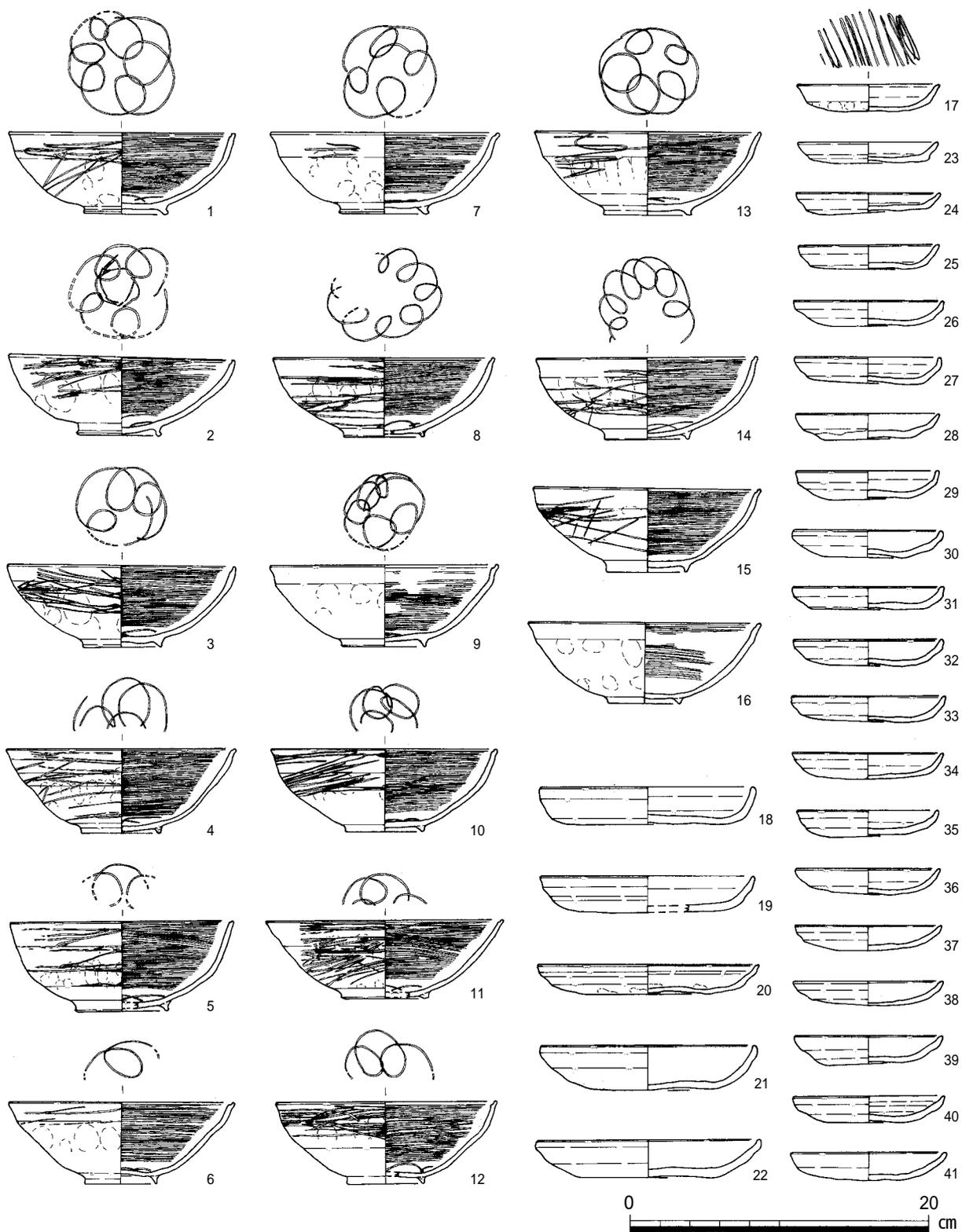


図7 土壙墓SX1001出土遺物実測図 (1/4)

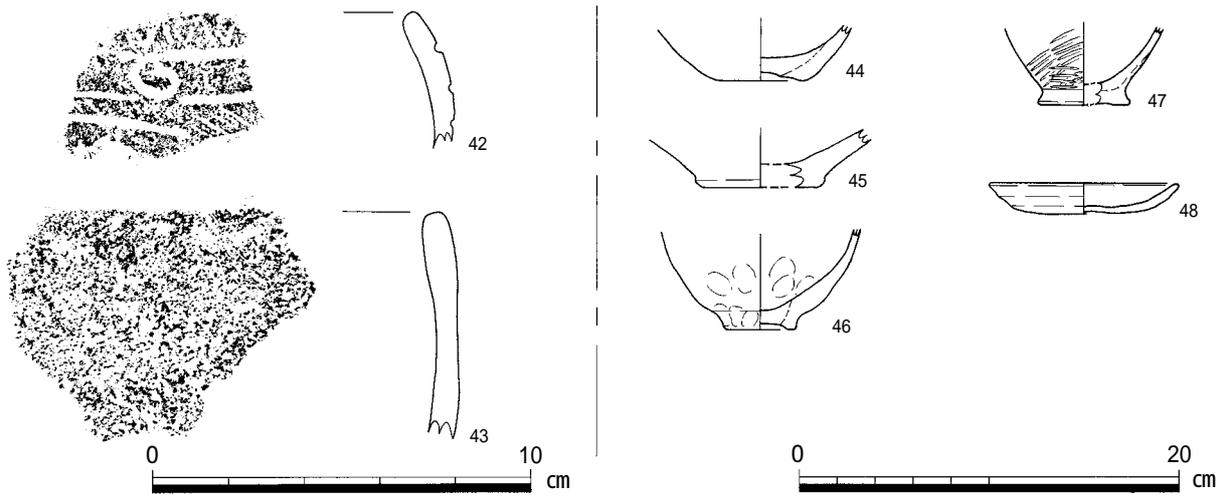


図8 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

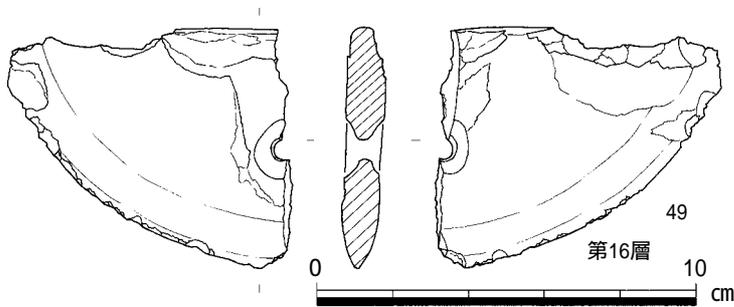


図9 石製品実測図 (1/2)

【註記】

- 1) 厚芝保一 1940「大福村新屋敷付近の弥生式遺跡」『磯城』3巻2号
- 2) 清水眞一 1991「東新堂・土地ヶ坪地区発掘調査概要」『1990年発掘調査報告書2』(財)桜井市化財協会
 清水眞一 1996「東新堂遺跡第3次発掘調査報告」『平成7年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
 清水眞一 1996「中和幹線道路予定地第4次発掘調査」『1995年度発掘調査報告書1』(財)桜井市文化財協会

第3章 大藤原京関連遺跡第36次調査報告

I. はじめに

大藤原京関連遺跡第36次調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。申請地は桜井市大字橋本91-2に位置し、期間は平成13年5月28日～6月1日の5日間実施した。調査区は拡張を行った結果、 $3.5 \times 7.5 + 1.5 \times 3$ mとなり、面積は合計 30.75m^2 となった(図10)。掘削するにあたり、表土についてはバックホーで除去したが、埋戻しは申請者の要請により行わずに終了した。

これまで周辺の調査では、今回の調査区より北側20mで実施した第6次調査で、弥生時代後期の方形周溝墓の周溝の可能性がある溝と飛鳥時代の建物の区画と考えられる溝が検出されている他、

東に約100mの位置で実施した安倍寺遺跡第9・11次調査では弥生時代後期・古墳時代前期の竪穴式住居が計4棟と古墳時代中期～藤原京時代の掘立柱建物が計3棟^{2・3)}検出されている。

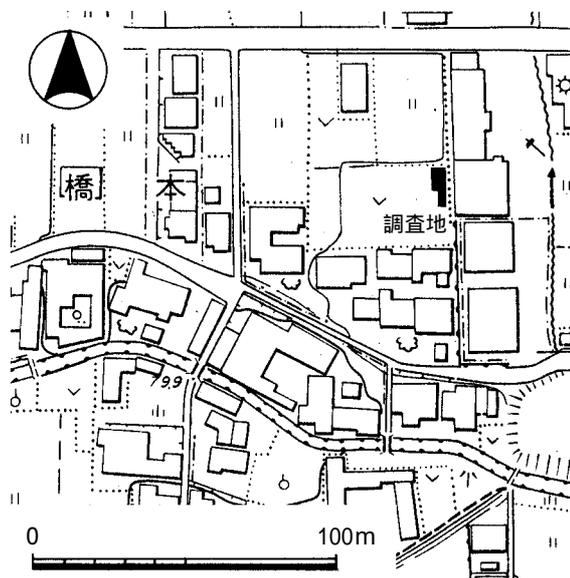


図10 トレンチ位置図 (1/2,500)

II. 基本層序

安倍寺遺跡や谷遺跡と同様、G.L-約20～40cmと比較的浅いレベルで遺構面が検出された。ただし遺構面は砂であり、浅い自然流路の可能性もあるが、断面ではラミナなどは確認できなかった。

- | | | | |
|-----|------|-----------------|----------------------|
| 第1層 | 耕作土層 | 暗青灰色小礫混じり極粗粒砂 | |
| 第2層 | 耕作土層 | 淡黄灰色小礫混じり砂質シルト | (土器小片若干含む) |
| 第3層 | 耕作土層 | 淡灰色小礫混じり砂質シルト | (土器小片若干含む) |
| 第4層 | | 黄灰色シルト質細粒砂～極粗粒砂 | (層厚20～30cm) |
| 第5層 | | 褐色砂質シルト | (層厚10～20cm、Fe沈着が激しい) |
| 第6層 | | 褐色礫混じり粗粒砂～中粒砂 | (層厚10～20cm、小～中礫多量) |

III. 遺構・遺物

第1面として第4層の直上で精査をかけたところ、東西方向に長く、幅40～50cm、長さ80cm～2m、深さ10～60cmの長方形の土坑を調査区全面で検出した。ただし時期は、埋土を掘削したところ層中から丸釘やビニール、プラスチック製品が出土したため、現代土坑になると考えられる。また土坑は南北方向に3列分並んでおり、畑の畝の様であるが、深さに大きく差がある上、フラスコ状にえぐれて

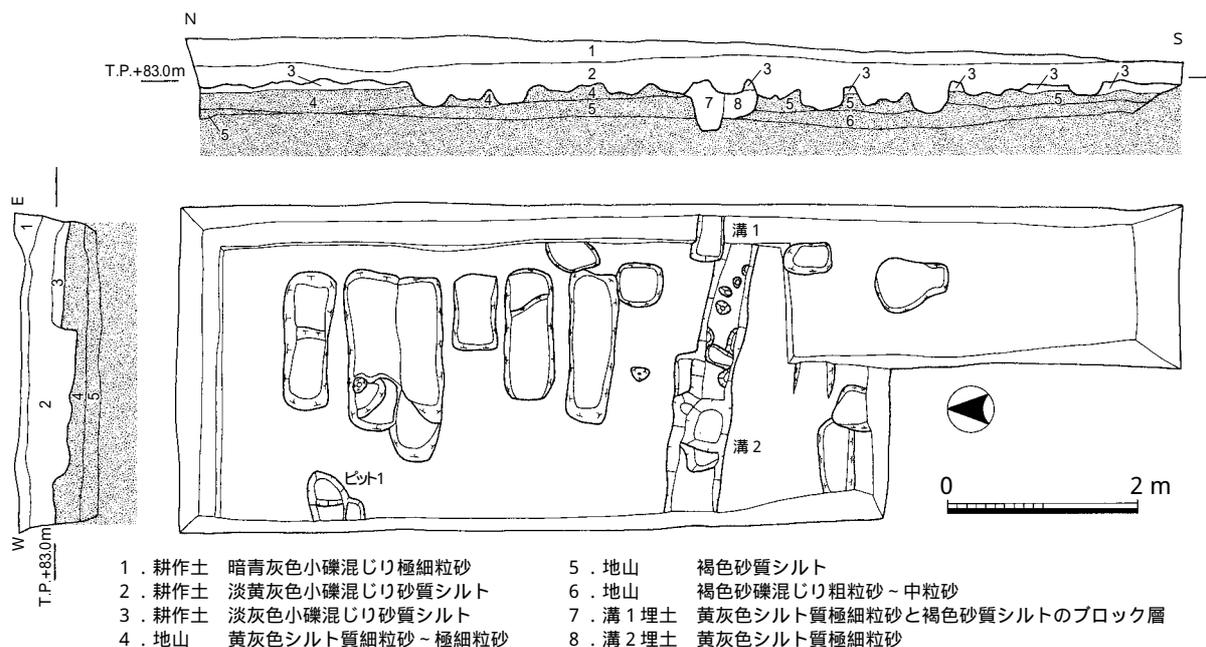


図11 調査区平・断面図 (1/80)

いるものがあるため耕作に伴うものではないと思われる。

確認のため第4層を掘り下げ、第2面として第5層上面でも遺構検出を行ったが、その結果、溝2条・ピット1基を検出する事ができた。溝1は検出幅36cm、検出長46cmを測り、溝2は検出幅41～58cm、検出長3.1mを測る。共に東西の方角には合わず、やや北西～南東方向に傾いている。ピット1は検出径55cmで深さは19cmである。これらの遺構からは、出土遺物が須恵器の小片以外ほとんど見られないが、現代遺物の混入も認められなかったため、第4層上面の土坑群とは異なり、時期は不明だが古い遺構と考えられる。なお調査区東断面の観察から、これらの溝・ピットは第4層から掘り込まれる遺構である事が確認できた(図11・図版5)。

IV. まとめ

申請地一帯を含め、吉備池遺跡から安倍寺遺跡、谷遺跡にかけては比較的耕作などによる攪乱も少なく、遺構の残りが良い地域である。しかし今回の調査区では、検出できた遺構と遺物は共に僅かであった。周辺の吉備池遺跡や安倍寺遺跡では、場所により遺構の密度に大きな差が見られるが、隣接地である大字橋本付近もそれに似通っていると思われる。今回の申請地付近は、どちらかと言えば低密度な地域と考えられる。

(松宮)

【註記】

- 1) 清水真一 1992「吉備池遺跡麦田地区の発掘調査」『1991年度発掘調査報告書3』(勸桜井市文化財協会)
- 2) 松宮昌樹 2000「安倍寺遺跡第9調査」『平成11年度 奈良県内市町村 埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 3) 松宮昌樹「安倍寺遺跡第11調査」『1999年度発掘調査報告書5』(勸桜井市文化財協会 未報告)

第4章 朝倉遺跡第4次発掘調査報告

I. はじめに

今回の調査は個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で、平成13年6月15日に実施した。調査地は朝倉小学校に東隣する、現状で宅地となっている区画である。周辺では当地の西約500mの脇本遺跡地内において集中して調査が行われており、5世紀後半～7世紀後半の居館跡とみられる大型建物群や、弥生時代後期の合口土器棺墓などが確認されている¹⁾。また雄略天皇の泊瀬朝倉宮の推定地としても知られる地域であり注目される場所である(図12)。

現地調査では建物基礎部分を外した敷地内に計18㎡の調査区設定を計画していたが、現地の攪乱が広範囲に及んでいたため、大幅な変更を余儀なくされた。最終的には1×3mの3㎡に対して、手掘りによる調査を行った。

II. 調査概要

まず調査地における層序は概ね暗灰褐色土(図13第1層)、明茶褐色弱粘質土(第2層)、明黄灰色粘質土(第3層)の3層に大別される。第1層は地表面より90cmまで認められる盛土堆積である。この層には旧建物に伴うコンクリート基礎や50cm大の石など移動困難な廃材が多く含まれており、その部分に関しては以下への掘り下げを断念せざるをえない状況だった。可能な部分について更に掘り下げたところ第2層を検出した。第2層は近現代の整地土と思われる厚さ20cmの堆積層であるが、遺物を伴わないため正確な時期は特定できなかった。第3層は安定した黄灰色土層であり精査を行なったが、遺構・遺物等は確認されなかった(図13・写真1)。

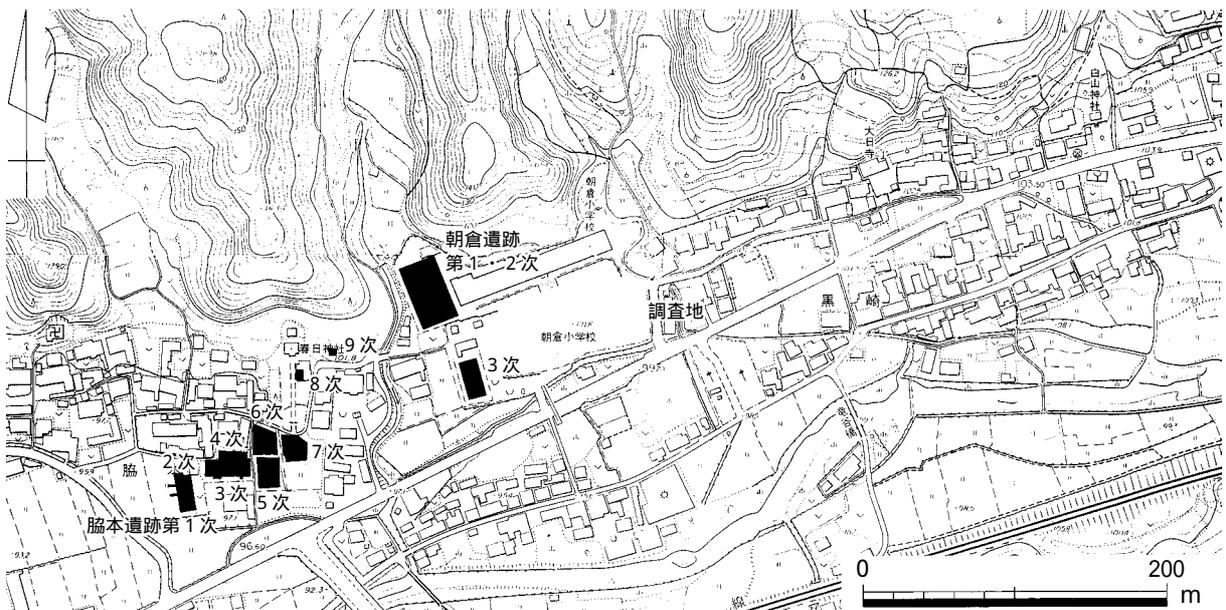


図12 朝倉遺跡第4次調査地位置図(1/5,000)

Ⅲ. まとめ

調査では顕著な遺構、及び遺物は確認されなかった。これについては調査区が非常に狭小だったことが第一の要因といえる。また当地は主要な成果が挙げられている地域から谷2本をはさんだ東側に位置することから、元来遺構密度の低い地域であることが推察される。更には当地表面の標高が他より1m前後低いため、遺構面がすでに削平されている可能性も考えられる。ただ今回のような狭小なトレンチでは調査に限界があり、周辺での今後の成果を待って再検討したい。(小畑)

【註記】

- 1) 前園実知雄 1985「桜井市脇本遺跡燈明田地区第2次発掘調査現地説明会資料」磯城・磐余の諸宮調査会
前園実知雄 1986「桜井市脇本遺跡第3次(苗田地区)発掘調査現地説明会資料」磯城・磐余諸宮調査会
前園実知雄 1986「桜井市脇本遺跡第4次(苗田地区)発掘調査現地説明会資料」磯城・磐余諸宮調査会
前園実知雄 1988「桜井市脇本遺跡第5次(宮ノ本地区)発掘調査現地説明会資料」磯城・磐余諸宮調査会
前園実知雄 1988「桜井市脇本遺跡第6次(宮ノ本地区)発掘調査現地説明会資料」磯城・磐余諸宮調査会
清水眞一 1990「脇本遺跡第7次発掘調査概報」磯城・磐余諸宮調査会
- 2) 清水眞一 2000「脇本遺跡第9次発掘調査」『1999年度発掘調査報告書4』(財)桜井市文化財協会

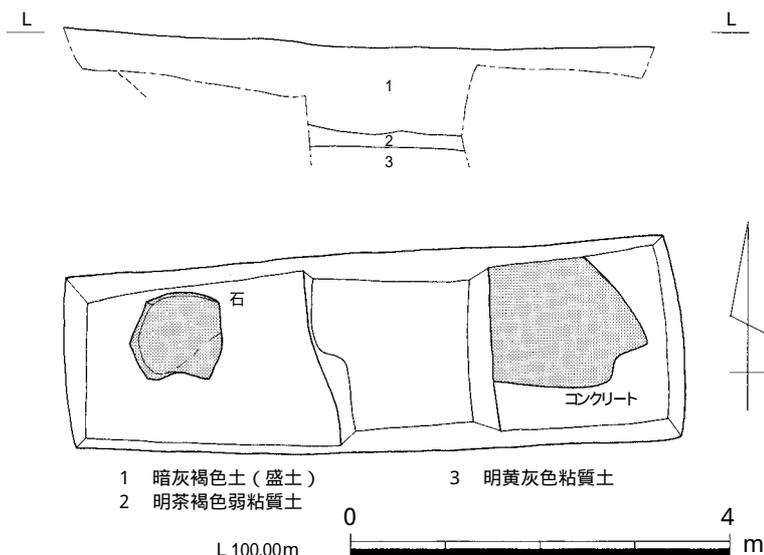


図13 調査区平・断面図 (1/80)



写真1 調査地全景(南西から)

第5章 吉備池遺跡第12次発掘調査概要報告

I. はじめに

吉備池遺跡の調査は桜井市大字橋本51-1番地、小字冠名において吉備池廃寺の範囲確認調査として平成13年7月11日から平成13年7月24日にかけて行ったものである。対象地は南門推定地の一つであるものの、大半が旧流路推定地上にあたり遺構の残存が疑問視されていた地点であるため、3m×41mの南北方向に細長いトレンチを設定して遺構の有無確認を行う事になった(図14・図版6、7)。

II. 周辺の過去の調査

吉備池廃寺の調査は1997年の桜井市と奈良国立文化財研究所の共同調査により、掘込み事業を施した巨大な金堂跡と見られる基壇が検出されたことに始まる。翌年にはその西方約50mで塔跡と見られる基壇が確認され、以降、東・西・南面回廊や僧坊・中門などの遺構が相次いで確認されており、現在では金堂や塔が極めて大きな規模を有する事や、遺物の年代、周辺に残る地名の考証などから舒明天皇が639年に発願して建設が始まった百濟大寺の可能性が高いと考えられている。

III. 調査の概要

検出された遺構はさほど多くはない。調査区全域を覆う暗灰色粘土(包含層)を除去すると細かい砂や拳大～人頭大の礫を少量含んだ暗褐色粘土層(ベース)が現れる。包含層は7世紀後半のほぼ天武朝期のものであり、唯一調査区南半で検出された溝状遺構だけが包含層を切り込んで掘られているが、他の遺構はいずれもこの包含層の下のベース面から検出されたものである(図15)。

北溝は調査区北端より約5mの地点において検出されたものであるが、石組みの残存状況が悪く、長さ1.7m分が確認されているのみである(図16・図版8)。溝の幅は石組みの内側で約30cm、内部の埋土は上部を覆う暗灰色粘土が詰まっていた。溝からの出土遺物には須恵器・土師器の細片のほか、瓦片も含まれている。南溝は調査区の中央部分において検出された溝で、石組みは確認できなかったものの、溝の内部には拳大の礫が多量に含まれており、埋土は北溝と同じ暗灰色粘土であった(図17・図版8)。溝はトレンチを横断して更に東西へと続いている。溝の幅は55cm前後で深さは15cm程度である。出土遺物にはごく少量の瓦や土師器の細片がある。南北両溝の中央に存在するベースの高まりは不整形の南北幅3.6m、高さ20cm程度の貧弱なものではあるが、天武朝期の遺物を含んだ包含層がこの上に被ってくることから古い段階から高まりとして存在していたことは確実である(図15・図版9)。

IV. まとめ

これらの遺構については、位置や構造から吉備池廃寺の南門に伴う雨落ち溝と基壇の名残と考えている。雨落ち溝の心々部分で想定される南門の規模は南北15m、東西は推定で18mであり、既に確認



图14 吉備池遺跡第12次調査地位置図 (1/2,000)

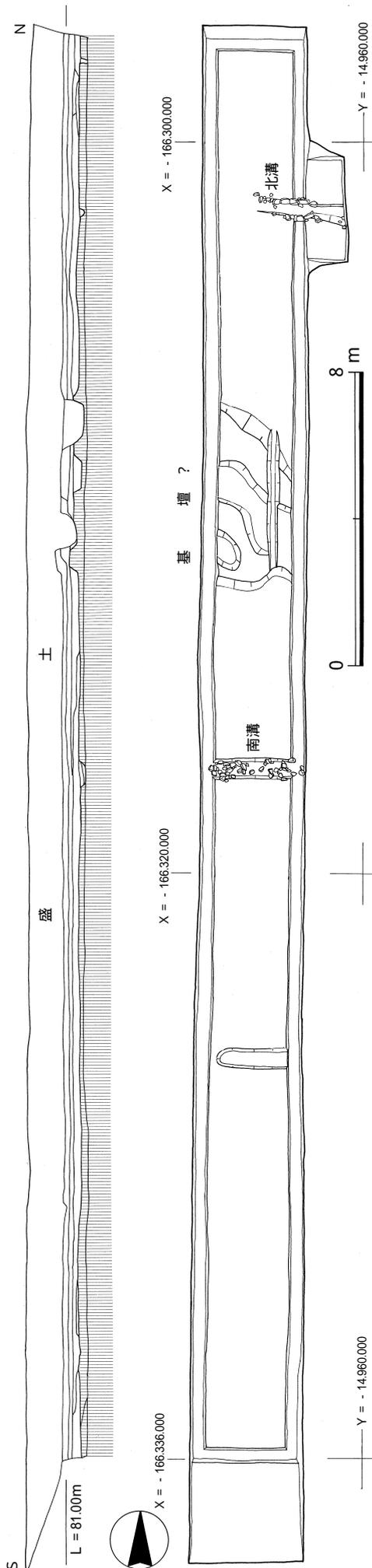


図15 調査区平・断面図 (1/160) ※コンタマーはすべて80.600m

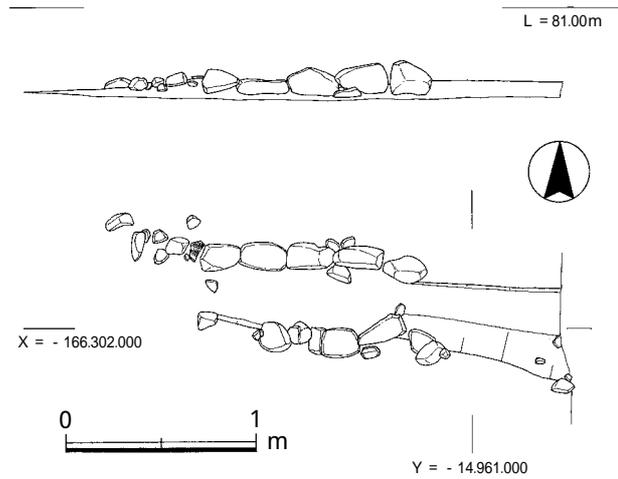


図16 北溝平・立面図 (1/40)

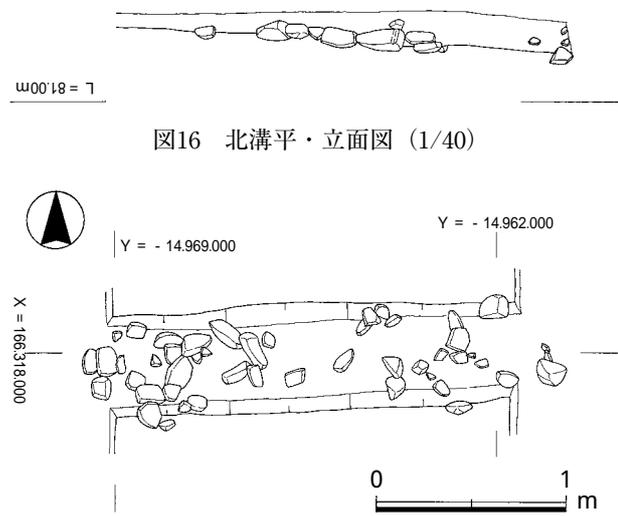


図17 南溝平面図 (1/40)

されている中門の規模を凌ぐものとなる。飛鳥時代の寺院としては南門よりも中門の規模が大きいのが通常であるが、吉備池廃寺のは中門よりも南門が大きくなる藤原・奈良時代寺院の伽藍の先駆けとなるものと理解したい。なお、図18では過去の調査において確認されている伽藍配置と寺域の復元案を提示している。南面大垣のラインは今回検出された南門の中心線を東西に延長したもので、東西両大垣は南面回廊と南面大垣との距離を均等に割り付けたものである。東面ではこの復元ライン上における吉備池遺跡第6次調査の第1トレンチで谷を埋めた大規模な整地土とバラス敷や柱穴などが確認されており、吉備池廃寺の東限を区画する施設の一部と考えられよう。

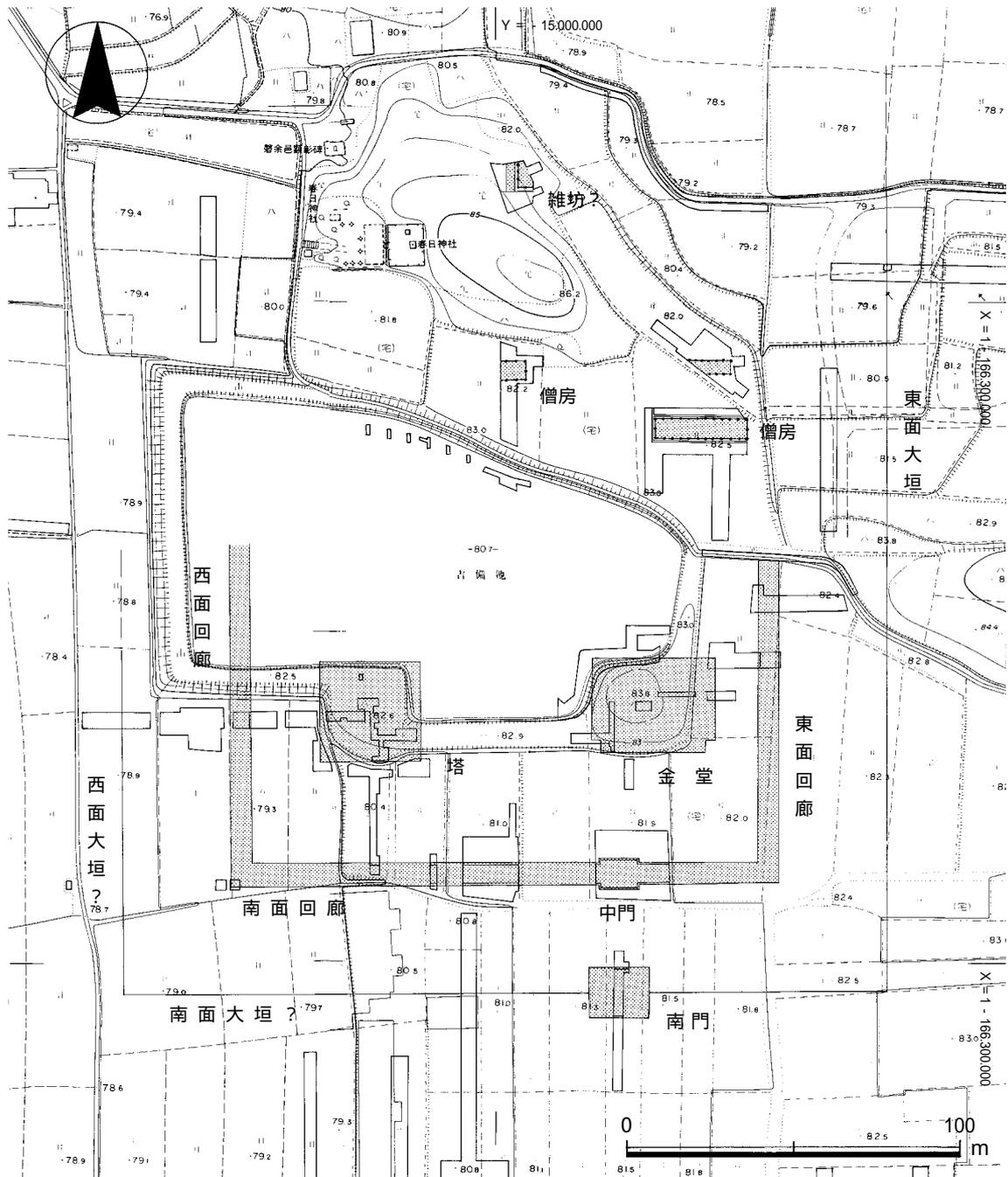


図18 調査地と確認された伽藍 (1/2,000)

北面大垣については吉備池遺跡第11次調査地²⁾や大藤原京第18次調査地³⁾において吉備池廃寺と同時期の遺構や遺物が多量に確認されている事から、北側の丘陵を東西に横断する農道部分までを寺域として想定しておきたい。(橋本)

【註記】

- 1) 清水眞一 1996「吉備池遺跡第6次発掘調査」『1995年度発掘調査報告書1』(勸桜井市文化財協会)
- 2) 橋本輝彦 2001「吉備池遺跡第11次発掘調査概要報告」『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 3) (勸桜井市文化財協会による1996年の発掘調査。未報告。)

第6章 纏向遺跡第123次発掘調査報告

I. はじめに

今回の調査は個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、平成13年7月30日から平成13年8月3日の実働5日間において実施した。調査地はJR巻向駅の南西約1km、初瀬川右岸に広がる沖積平野上に立地しており、付近の標高は約65mを測る。当地は弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする集落遺跡として著名な纏向遺跡の範囲に含まれ、その南西端に位置している。纏向遺跡ではこれまでに120件を越える調査が行なわれているが、周辺は未だ調査例が少ない地域である。よって当調査は、遺跡南西部における土地利用状況を把握する上で注目された（図19）。

II. 調査の方法と層序

現地調査では、建物基礎部分を外した対象地の北端に南北2m×東西7m、計14m²の調査区を設定し、西より掘削を開始した。まずバックホーによる掘り下げを行なったところ、地表面に見られる整地層下で旧耕作土、床土層を確認した。更にこれらを除去した段階で古墳時代等の遺物が出土し始めたため、機械掘削は床土層までとし、以下については人力により作業を進めた。

次に本調査地における基本層序は、1. 淡褐色砂（図20第1層）、2. 淡褐色砂礫（第2層）、3. 暗灰色土（第3層）、4. 淡黄灰色粘質土（第4層）、5. 茶灰色弱粘質土〈細砂を多く含む〉（第5層）、6. 茶灰色粘質土〈細砂を多く含む〉（第6層）、7. 淡黄褐色粘質土～灰白色砂（第11～13層）の7層に大別される。第1・2層は当地を宅地造成するために施された整地土で、両層あわせて1mを測る。第3層は旧耕作土、第4層は床土で、第3層上面の標高は周囲の水田面と揃っている。第5・6層は基

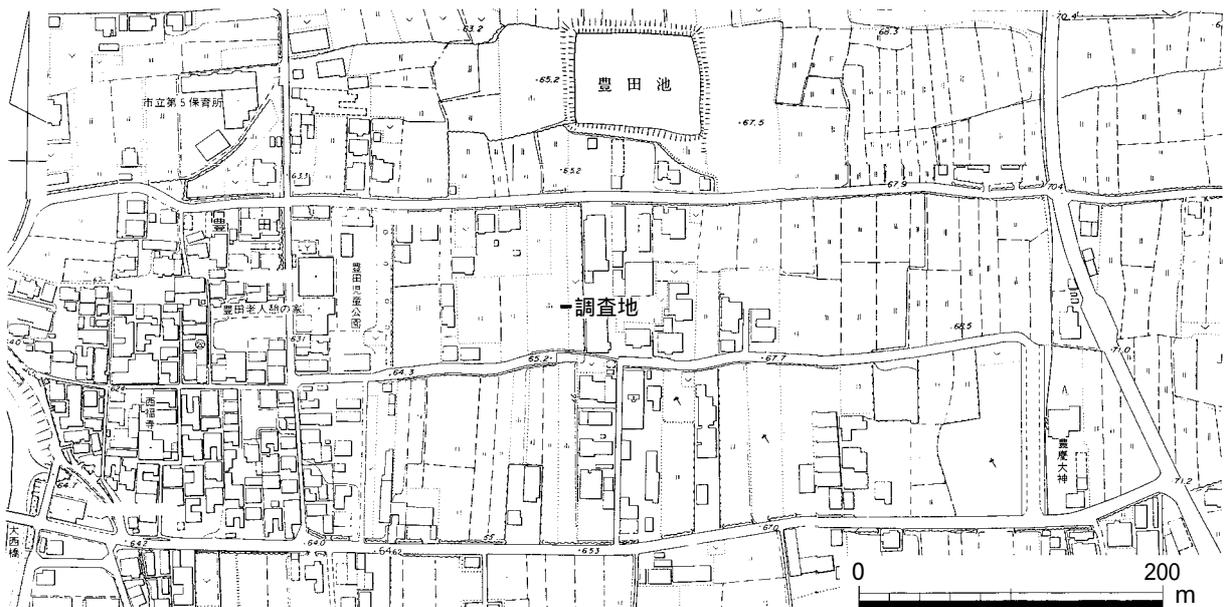


図19 纏向遺跡第123次調査地位置図（1/5,000）

本的には同じ堆積層と考えられる。砂を多く含む粘性の弱い土層で、古墳時代後期を中心とする遺物を包含している。第7層は当地のベースとなるもので、この面ですべての遺構が検出された。第7層については部分的に断割を行なったところ、砂を多く含む数種の層が認められたが、すべて一連の沖積層と考えられる。なお断割部分から遺物は全く出土していない。

Ⅲ. 検出遺構・出土遺物

本調査では、落ち込み、溝、柱穴などの遺構が確認された（図20・図版10）。

落ち込みSX-1001 トレンチ西半で東肩の一部などが検出された。規模は現状で幅2.5m以上、深さ0.2mである。埋土は暗灰褐色粘質土と暗灰茶色粘質土からなり、小片ではあるが古墳時代後期の須恵器、13世紀後半とみられる瓦器碗片などが出土している。

溝SD-1002 トレンチ東端で西肩が部分的に検出された。深さは30cmあり、断面形は逆台形を呈すると思われる。また埋土は1層で、茶褐色粘質土が堆積する。出土遺物には土師質の土器小片が数点あるが、摩滅が著しいため所属時期は特定できない。

主な出土遺物には、古墳時代後期の須恵器甕片、瓦器碗片、土師器片などがあるが、いずれも細片のため図化できるものはなかった。

Ⅳ. まとめ

今回は調査面積が狭小であったにも関わらず、遺構を確認できたことは調査成果としてまず評価出来よう。個々の遺構の詳細については、出土遺物量、調査面積の制約などから判然としない点が多い結果となったが、今後の周辺での成果に期待し、再検討したいと考える。 (小畑)

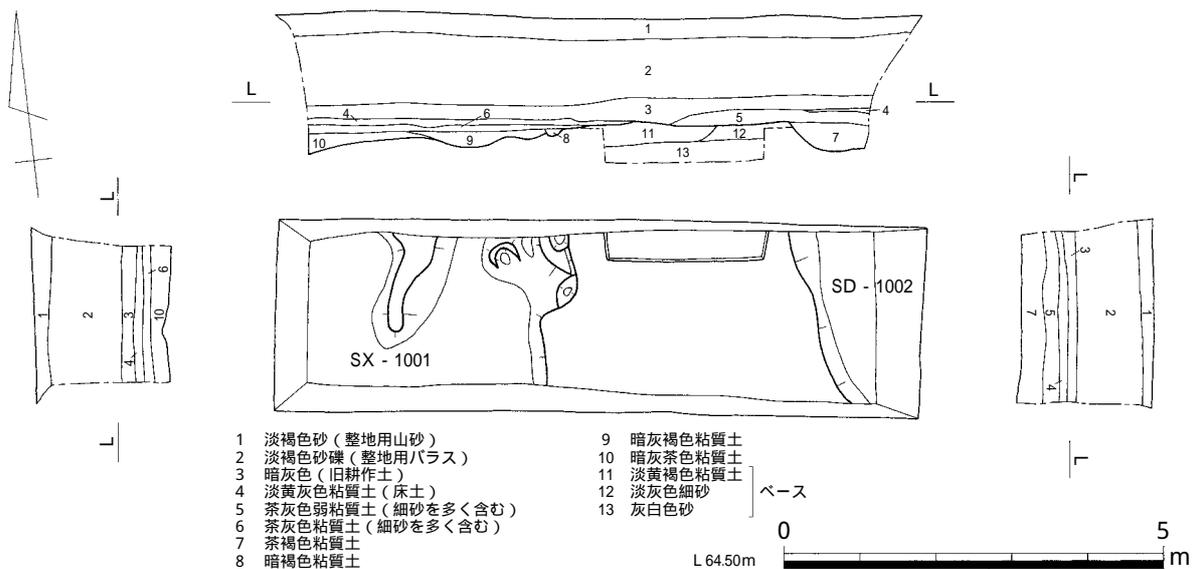


図20 調査区平・断面図（1/100）

第7章 三輪遺跡第19次発掘調査報告

I. はじめに

今回の調査は桜井市三輪159-1、160-1において平成13年8月23日～8月29日にかけて実施した、個人住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地はJR三輪駅から東に400m、三輪山から派生する丘陵緩斜面に位置しており、付近の標高は約82mである（図21）。当地周辺には南北朝の動乱期に南朝方として参戦した高宮勝房（三輪西阿。戒重西阿と同一人物と考えられる。）の居城とされる三輪城が存在することから、主に中世に関する成果が得られるものと予想された。

II. 調査の方法と層序

現地調査では、建物基礎部分を外した敷地内に南北4m×東西10m、総面積40㎡の調査区を設定し、東より掘削を開始した。まずバックホーを用いた表土除去を行い遺構面の検出に努めたところ、地表下50cmで姿を表す地山を切り込み面として遺構が確認されたため、地山上面を露呈させ、以下については人力による作業に切り替えた。

次に調査地内における基本層序は、淡褐色土と黄褐色砂との互層（図22第1層）、灰褐色土（第2層）、明褐色砂質土（第3層）、淡褐色砂～淡黄褐色粗砂（第20層）の4層に大別される。このうち第1層は表土、第2層は旧畑土と考えられる堆積層である。第3層は、サヌカイト剥片や須恵器大甕片など古い時期の遺物も含むが、14世紀中頃～後半の遺物が大半を占めることから、この時期に形成された堆積層であると考えられる。第20層地山は、地形に沿うかたちで西へ向かって緩やかに傾斜しており、調査区内における東西端での比高差は50cmを測る。



図21 三輪遺跡第19次調査地位置図（1/5,000）

Ⅲ. 検出遺構

遺構は、すべて地山を切り込み面として検出された。主なものには南北方向の掘割3条がある。掘割はすべて尾根に直行するかたちで平行に構築され、所見からいずれも同規模と考えられる。また、SD-1001~1002間、SD-1002~1003間は土塁と考えられ、SP-1001は土塁上に構築された柵の痕跡と見られる。加えて第18・19層は土塁成形のために施された盛土と推定される（図22・図版11）。

まず、SD-1001は西半のみの検出であるため、明確な幅は分からない。深さ1mで、埋土は概ね3層に大別される。このうち最上層の淡褐色弱粘質土は厚さ40cmにわたって堆積するもので、他の掘割の最終的な埋没土層と共通する。出土遺物には土師器の小皿、摺鉢などがあり、いずれも14世紀前半の所産と考えられる。

調査区中央に位置するSD-1002は唯一両肩が検出された掘割で、幅約3.2m。深さは地形に比例して60cm~1.3mを測り、掘割断面は逆台形を呈する。埋土からは土師器の細片などが僅かながら出土しているが、時期を特定できるものはなかった。

SD-1003は幅こそ解らなかつたものの現況での幅約2m、深さ80cmを測る掘割である。掘割断面は概ね逆台形だが、南半については更に一段落ち込む状況が看取される。埋土は上から淡褐色弱粘質土、淡茶色粘質土、（粗砂を多く含む）、淡褐色砂が堆積する。また埋土より飛鳥~奈良時代と考えられる土師器杯C、須恵器杯B蓋なども認められるが、土師器羽釜、摺鉢など、14世紀前半に位置付けられる遺物が大半を占めている。

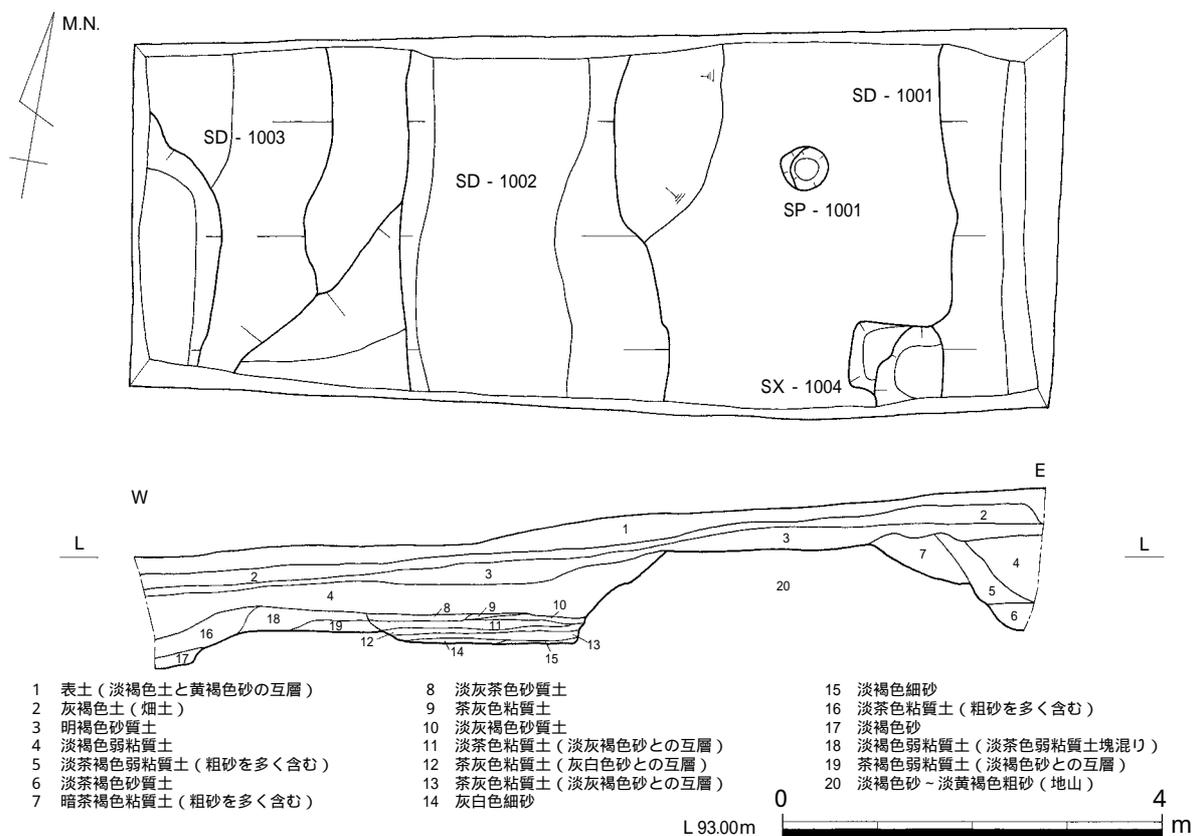


図22 調査区平・断面図（1/80）

落ち込みSX-1004は、SD-1001以前に構築された遺構で、現状での平面形態は不定四角形を呈している。深さ30cmで、暗茶褐色粘質土（粗砂を多く含む）が堆積する。時期は分からない。

IV. 出土遺物（図23・24 1～7・図版12-1～7）

掘割埋土を中心に遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。しかし大半が実測不可能な細片で、図化できたものは少ない。まず、1はサヌカイト製の石鎌で、SD-1002上層の淡褐色弱粘質土より出土した。二次堆積で当地に流入したものである。長さ2.3cm。2はSD-1003出土の土師器杯Cで、口径17cm、器高3.95cmを測る。形態などから飛鳥IV～V段階に位置づけられるものと考えられる。3は須恵器杯B蓋は奈良時代所産の遺物と考えられるもので、SD-1003出土。4～7は掘割の時期を裏付ける資料で、いずれも14世紀前半に比定されるものと考えられる。

V. まとめ

今回の調査では、当初の予想通り鎌倉時代後半～南北朝時代の掘割と同時期の遺物が確認された。これらは時代背景を踏まえて、三輪城に関連する遺構と考えられる。三輪城はその周辺の地勢から、平等寺から日向神社界隈に本体があるものと推定されているが、直接城郭に関連する遺構が検出されたのは今回が初めてである。図25では、周辺の地形における本調査地の位置関係を示してみた。これによると、当地の東側で地形が一段上がっており、そのラインが日向神社に向かって直線的に延びている

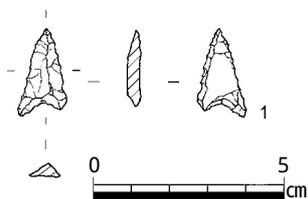


図23 石製品実測図 (1/2)

ることが分かる。SD-1001とこの段迄の距離が約3mであり、掘割1条の幅とみることができる。よって、現地形が三輪城構築段階の区画を踏襲すると考えるならば、SD-1001の東にさらに土塁を構え、その背後には城の本体となる平場が存在するものと推察される。いずれにせよ、今回の成果は、中世三輪城の歴史的背景を考古学的に検証する上で有益な資料となるであろう。 (小畑)

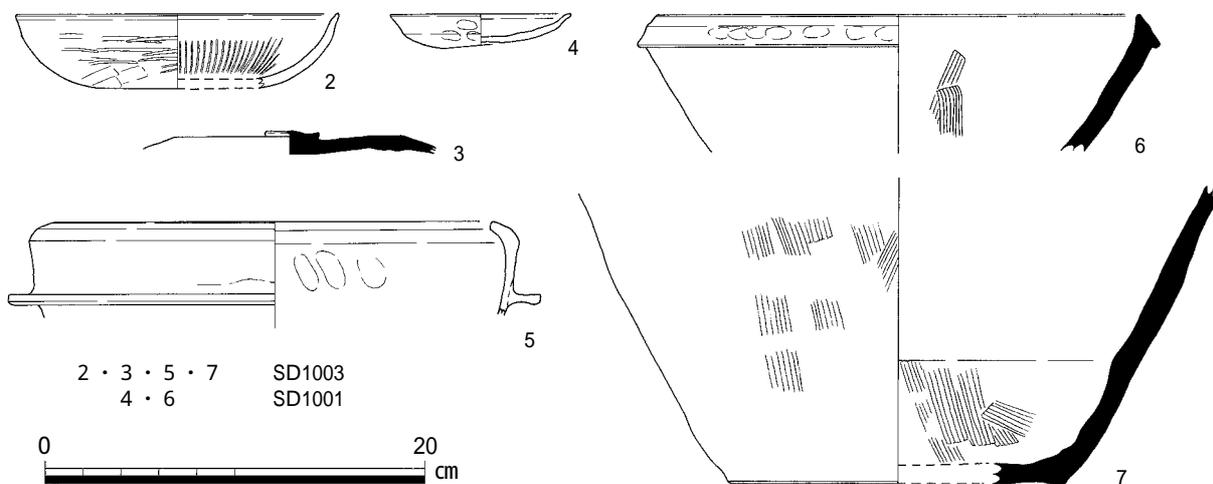


図24 出土遺物実測図 (1/4)

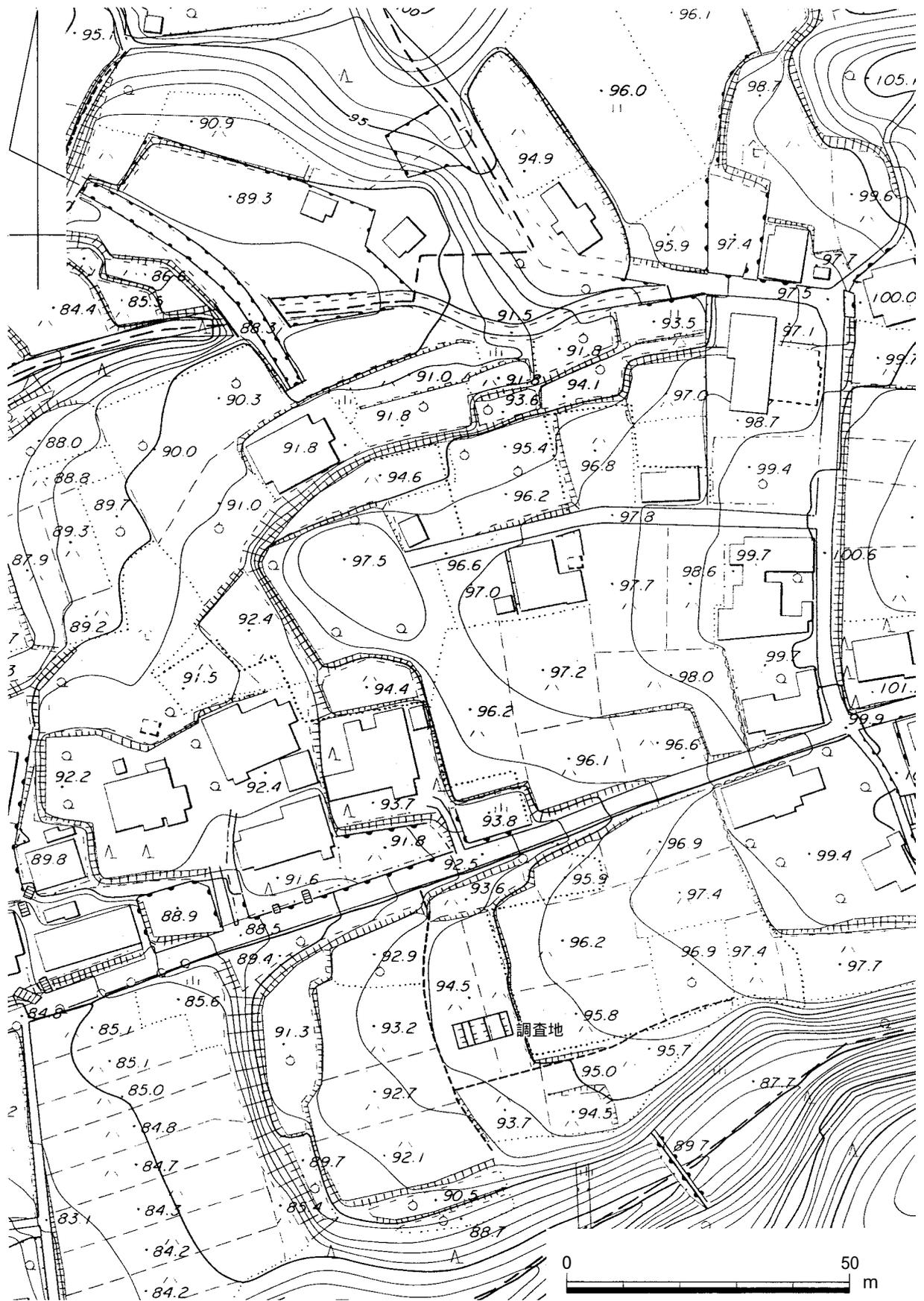


図25 三輪城周辺の地形と調査地 (1/1,000)

第8章 纏向遺跡第124次発掘調査報告

I. はじめに

纏向遺跡第124次発掘調査は大字東田198-1番地、字九文田における農業用倉庫の建築にともなうものである。調査区は対象地の南端部分に12×2mのトレンチを設定、バックホーによって掘削を行い表土下40cmで土坑2基と古墳周濠と考えられる落ち込み1基を確認している（図27・図版13）。

II. 調査の概要

周濠は濠外肩のコーナー部分が確認されたのみであり、南西辺は4m、南東辺は2m分を確認している。周濠の深さは50cmであり、堆積は大きく3層に大別することができ、出土遺物には土師器・須恵器の破片があるが埴輪はない（図28・図版14）。

なお、今回の調査から古墳全体を伺うことは困難であるが、調査区の北側において行われた第69次調査の第4・5トレンチでは本古墳に関連する遺構は確認されていない事から、本来の墳丘の形状は一辺15m前後、周濠を含めた全体の規模は一辺23m程度の方墳であったと考えられる（図26）。

III. まとめ

先述した第69次調査では径20m程度の円墳の周濠（高塚古墳）が確認されている事から¹⁾、未確認の古墳も含めて、ごく小規模な群を形成していたと考えられる。纏向遺跡内での6世紀代の埋没古墳の

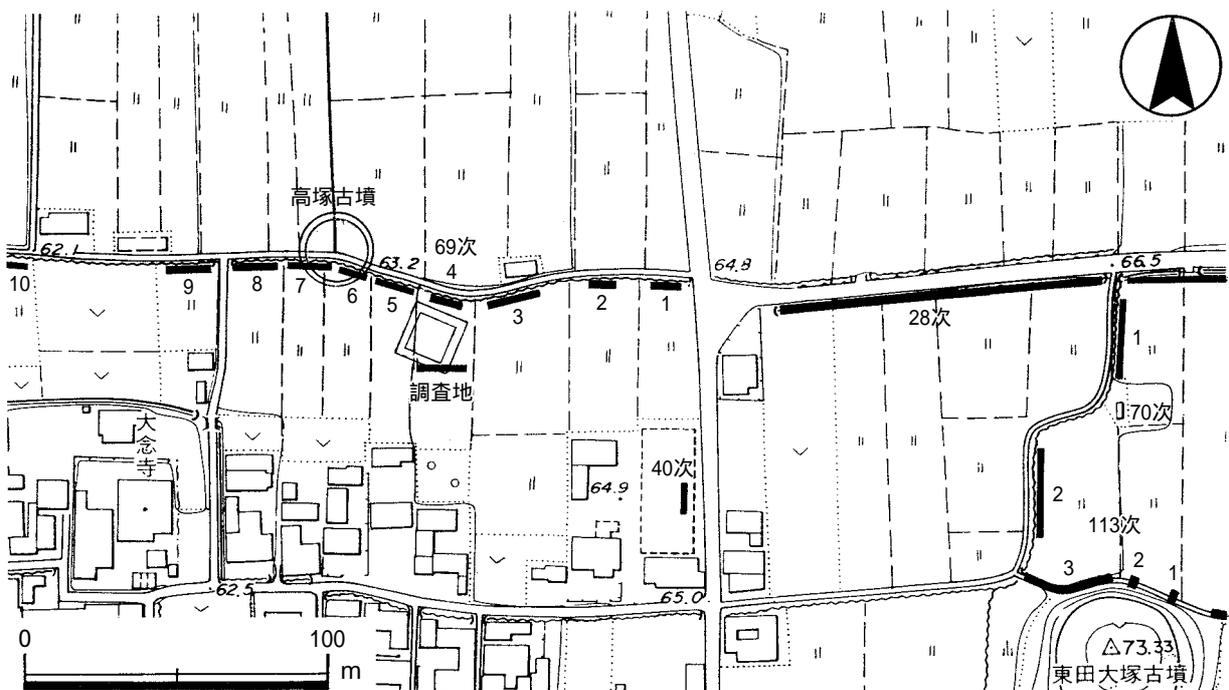
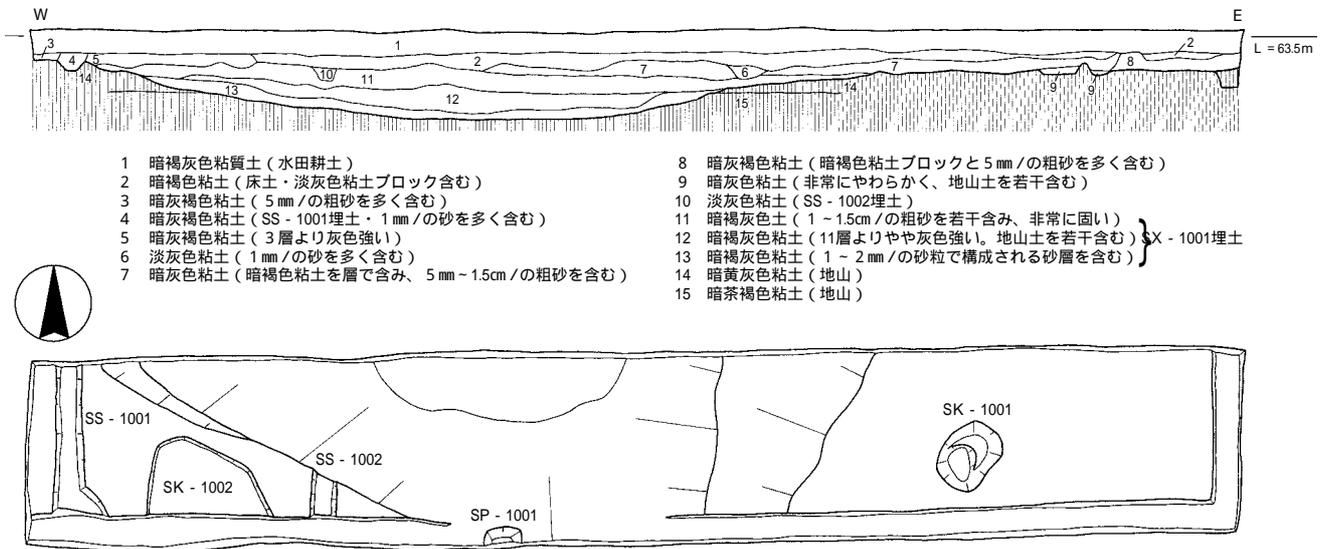


図26 纏向遺跡第124次調査地位置図 (1/2,500)

検出はこれで6基目であるが、今後の調査により更にその数は増加するものと予想される。(橋本)

【註記】

1) 清水真一 1993『纏向遺跡・第69・70次発掘調査報告書』桜井市教育委員会



- | | |
|--------------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色粘質土(水田耕土) | 8 暗灰褐色粘土(暗褐色粘土ブロックと5mm/の粗砂を多く含む) |
| 2 暗褐色粘土(床土・淡灰色粘土ブロック含む) | 9 暗灰色粘土(非常にやわらかく、地山土を若干含む) |
| 3 暗灰褐色粘土(5mm/の粗砂を多く含む) | 10 淡灰色粘土(SS-1002埋土) |
| 4 暗灰褐色粘土(SS-1001埋土・1mm/の砂を多く含む) | 11 暗褐色粘土(1~1.5cm/の粗砂を若干含み、非常に固い) |
| 5 暗灰褐色粘土(3層より灰色強い) | 12 暗褐色粘土(11層よりやや灰色強い。地山土を若干含む) |
| 6 淡灰色粘土(1mm/の砂を多く含む) | 13 暗褐色粘土(1~2mm/の砂粒で構成される砂層を含む) |
| 7 暗灰色粘土(暗褐色粘土を層で含み、5mm~1.5cm/の粗砂を含む) | 14 暗黄灰色粘土(地山) |
| | 15 暗茶褐色粘土(地山) |

図27 調査区平・断面図(1/80)

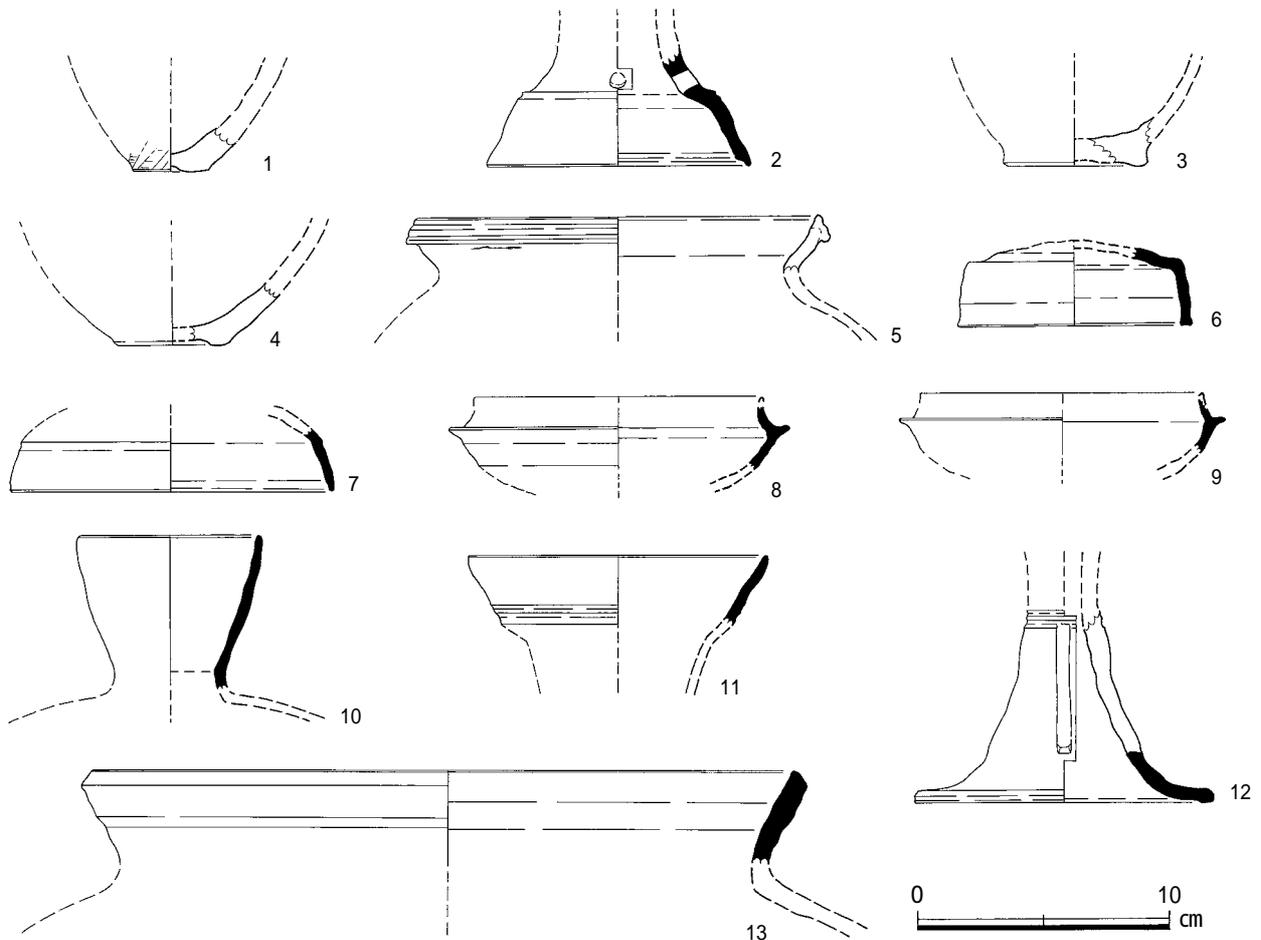


図28 出土遺物実測図(1/3) 1 覆土一括 2~13 SX-1001

第9章 吉備遺跡第14次発掘調査報告

I. はじめに

今回の調査は個人住宅建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査で、平成13年9月21日～平成13年9月27日にかけての実働4日間実施した。調査地は近鉄大福駅の南約700m、池之内丘陵の北側に広がる段丘上に立地しており、付近の標高は77.6mを測る。

当地は縄文～奈良時代にかけての複合遺跡である吉備遺跡にあたるほか、大藤原京の範囲にも含まれている。周辺では、当地の西約100mで行なわれた第12次調査で古墳時代前期の壺棺墓、溝などが検出されている。これは遺跡内で古墳時代の土器棺墓が確認された初例であり、遺跡の新たな展開を示す成果として注目される。また吉備池廃寺にも程近く、大藤原京の範囲にも含まれることから、多時期に関わる成果が挙げられるものと予想された（図29）。

II. 調査の方法と層序

現地調査では対象地に南北2m、東西15mの調査区を設定し、バックホーによる表土除去を行なった。その後作業員を動員し人力により遺構検出、掘り下げを行なった。なお、調査総面積は30㎡である。調査地における基本層序は概ね、淡灰褐色土（図30第2層）、茶灰色粘質土（第6層）、黄褐色粘質土（第12層）の3層に大別される。まず第2層は、地表面から厚さ20cmで堆積する現代畑土層で、調査直前まで使用されていた畑土層である。第6層は、調査区西半で認められる厚さ10cm前後の土層である。全体的に遺物包含量は少なかったが陶磁器片が出土することから、近世～近代もしくは現代まで下る畑土層と考えられる。地山は地表下30～40cmで確認される安定した黄褐色土層で、遺構はす



図29 吉備遺跡第14次調査地位置図（1/5,000）

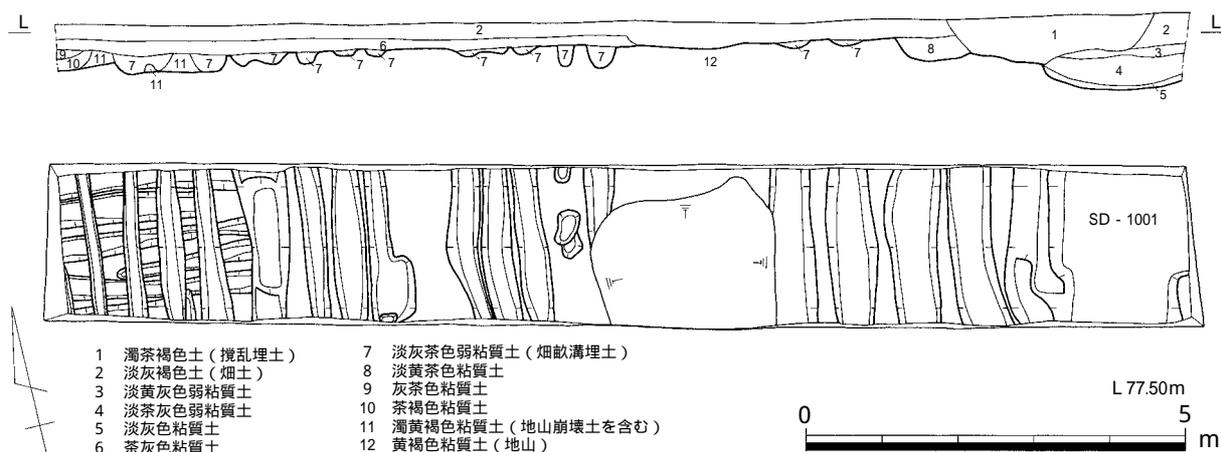


図30 調査区平・断面図 (1/100)

べてこの面を検出面としている。

Ⅲ. 検出遺構・出土遺物

地山面を切り込み面として、近現代の畑作に関する南北溝17条、同じく東西溝6条、掘割状の溝、柱穴が検出された(図30・図版15)。畑作に伴う溝々は幅30~50cm、深さ10~30cmを測る素掘溝で、淡灰茶色弱粘質土が堆積している。埋土からの遺物は少ないが、時期の新しい陶磁器片が含まれる。最東端で検出された溝SD-1001は現状で幅2m以上、深さ60cmの規模を有するもので、土地区画溝になるものと考えられる。埋土は上から淡黄灰色弱粘質土、淡茶灰色弱粘質土、淡灰色粘質土の3層がほぼ水平に堆積している。畑作に伴う溝々と同時期とみられる遺物が出土しており、所属時期は近現代と考えられる。柱穴は計3基確認された。いずれも畑作関連の溝々と同様の淡灰茶色弱粘質土が堆積しており、近現代の遺構であると考えられる。

Ⅳ. まとめ

以上、今回は当初の予想とは異なり吉備遺跡に関する主だった遺構、遺物は検出されなかった。これは元来の遺構密度の希薄さからの影響とも捉えられるが、遺構面が比較的浅くで検出されたことから、すでに削平されている可能性も否めない。周辺での更なる調査成果を待って再検討したい。

(小畑)

【註記】

- 1) 村上薫史 2000「吉備遺跡第12次調査報告」『1999年度発掘調査報告書3』(財)桜井市文化財協会

第10章 上之宮遺跡第14次発掘調査報告

I. はじめに

今回の調査は個人住宅建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査で、平成13年10月2日～10月3日にかけての実働2日間実施した。調査地は近鉄桜井駅の南約1.5kmに所在する。また周辺地形は寺川西岸に形成された河岸段丘にあたっており、付近の標高は約103mを測る。上之宮遺跡ではこれまでに6世紀末～7世紀初頭の居館遺構ならびに庭園遺構などが確認されている¹⁾。当地はその隣接地にあたることから、関連遺構などの検出が予想される場所である(図31)。

II. 調査の方法と層序

現地では敷地内に東西6m×南北4mの調査区を設定し掘り下げを開始したが、基礎等の規制から現状のようなL字形に設定変更した。作業ではまずバックホーによる表土除去を行い、その後作業員を動員して調査を進めた。なお調査総面積は13㎡である。

また本調査地では、すでに盛土を施した大がかりな造成がなされており、地表下約2.5mまで掘り下げたが、壁面崩落の危険性などを踏まえた結果以下への調査は断念している(図32・写真2)。よって遺構検出面ならびに地山は確認できなかった。今回調査できた面までの基本層序は、1. 盛土(図32第1層)、2. 青灰色粘質土(第2層)の2層である。まず第1層は平均して地表下2m前後まで堆積し、調査区東半では谷地形に沿ってさらに下方に及ぶ層で、グリ石を多く含む軟弱な造成土である。第2層は旧耕作土に上層の盛土が染み込んだ様な堆積層である。今回は第2層上面検出段階で精査し、平・断面観察を試みた。しかし明瞭な遺構、遺物は確認されなかった。

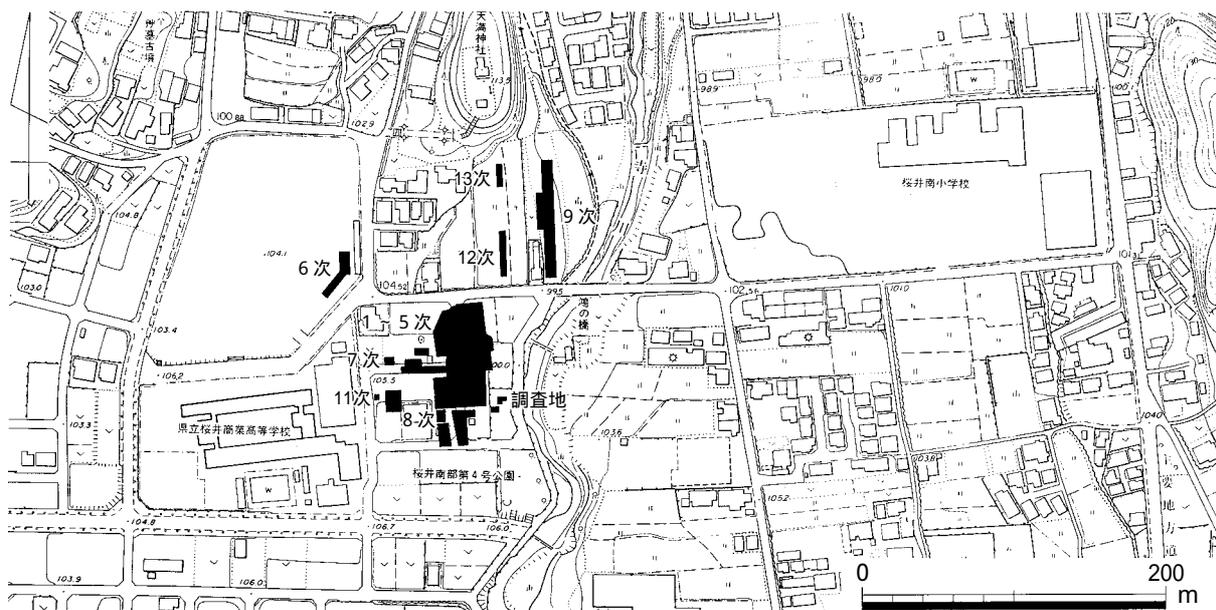


図31 上之宮遺跡第14次調査地位置図(1/5,000)

Ⅲ. まとめ

今回の調査では、結論的には有益な成果を得ることができなかった。現地は居館遺構のある平坦面の東端で、寺川が流れる谷筋の西側斜面にあっていることから、遺構立地には適さない地形であったと考えられる。調査区断面の盛土堆積状況からも、地形的に東へ落ち込むことは明白である。ただ狭小な調査のため断定は避け、今後の成果に期待したい。(小畑)

【註記】

- 1) 清水真一編 1989『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会
- 清水真一 1990「上之宮遺跡第5次調査概要」『1989年度発掘調査報告書2』(財)桜井市文化財協会
- 清水真一 1997「上之宮遺跡第9次発掘調査報告」『1996年度発掘調査報告書1』(財)桜井市文化財協会

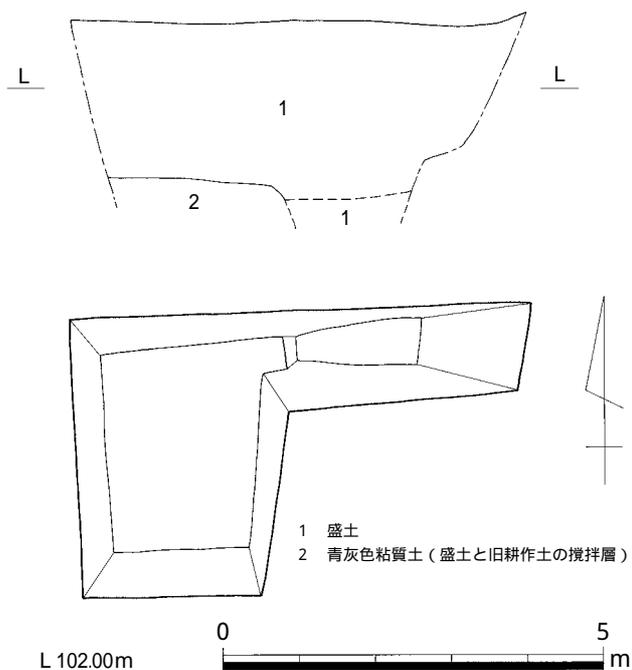


図32 調査区平・断面図 (1/100)



写真2 調査地全景 (北から)

第11章 茅原遺跡第11次発掘調査報告

I. はじめに

本調査は桜井市大字芝1158-1番地、字駒留における個人住宅の建築に先立つもので、トレンチは住宅の基礎部分を外した対象地の北西隅に6×4.5mのグリッドを設定した(図33)。

当該地での遺構は過去の周辺での調査成果から織田藩の陣屋面と地山面の二面において存在することが判明しているため、上層の陣屋面までを重機によって掘削を行い、以下の陣屋造成時の整地土及び、下層地山面の調査は攪乱の及んでいない西端部分を人力によって行っている(図35・図版16)。

II. 調査の概要

上層の調査

上層において検出された遺構は土坑が2基だけであり、顕著な遺構は確認できなかった。SK-1001は直径1.3m、深さ20cmの浅い土坑で、埋土は暗褐灰色砂質土の1層であった。出土遺物には土師器と磁器の破片が少量ある。SK-1002は直径60cm、深さ8cmのごく浅い土坑で、埋土は暗褐灰色砂質土の1層であった。出土遺物には土師器と磁器の細片が少量ある。

下層の調査

下層の調査では陣屋造成時の整地土から陶器や磁器、土師器などの近世遺物が多く出土している。整地土は厚さ30cmで、整地土の直下には中世代のものと推定される耕作土があり、さらに下層には6世

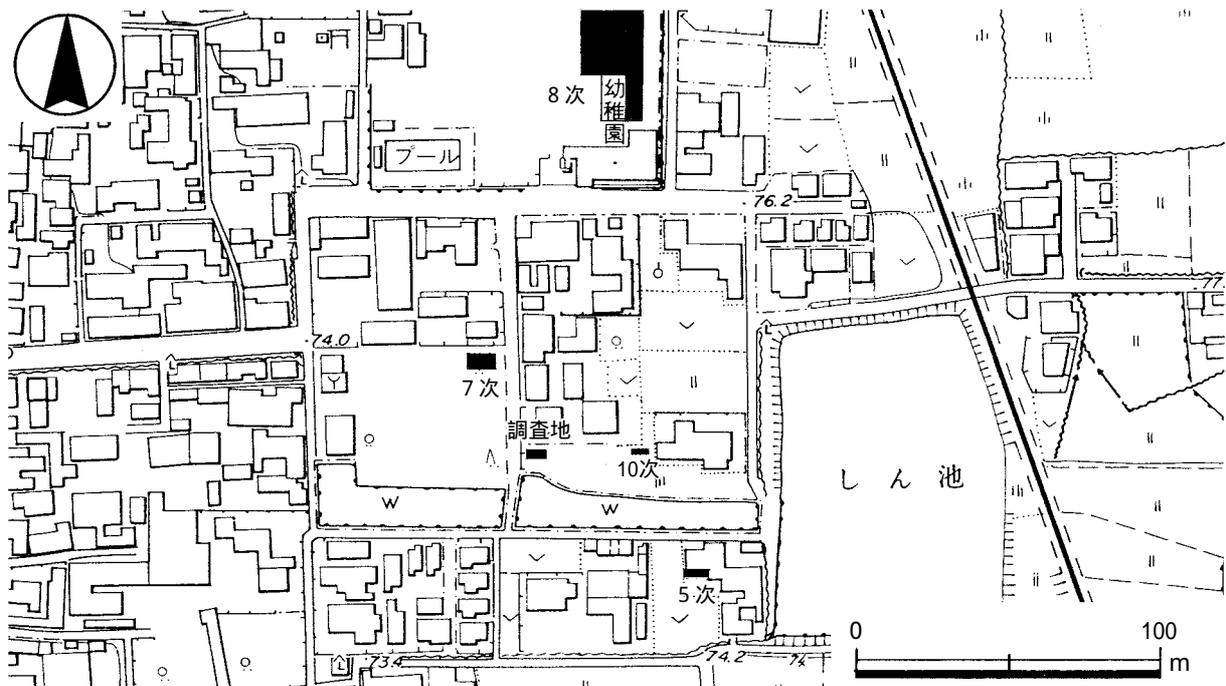


図33 茅原遺跡第11次調査地位置図 (1/2,500)

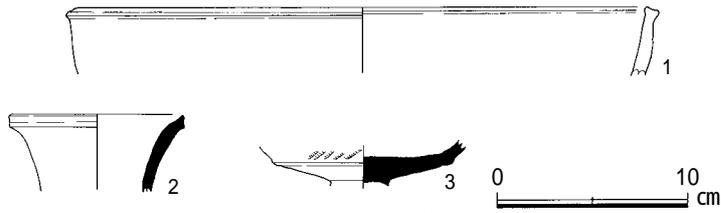


図34 包含層出土土器実測図 (1/4)

紀代の遺物を含んだ包含層が確認できる。なお、包含層からの出土遺物には図34-1~3・図版22-1~3に示した須恵器や土師器の破片がある。包含層の下には比較的安定した地山である

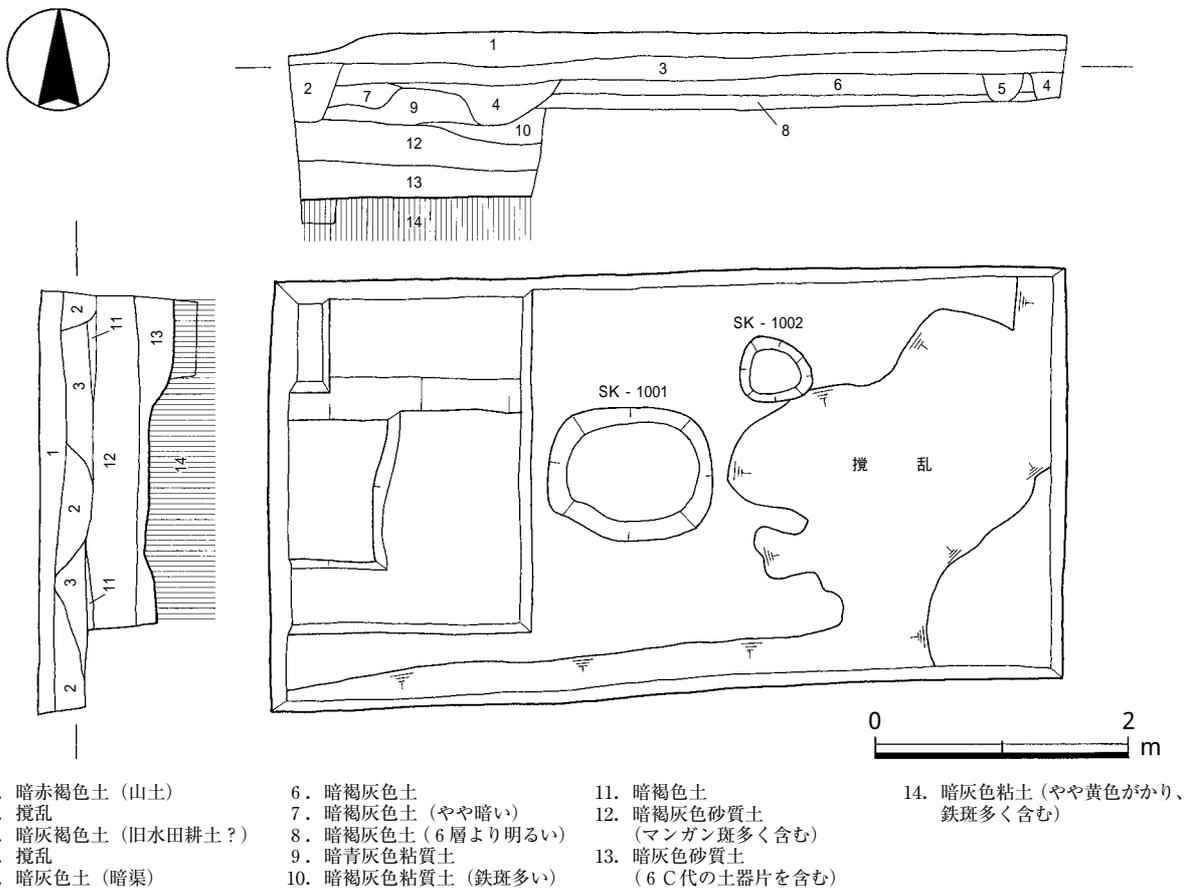
暗灰色粘土が存在し、地山面においては古墳時代後期のものと考えられる幅90cm、深さ16cmの東西方向の浅い溝状の落ち込みを確認しているが、矮小な調査のためその性格については明らかではない。

Ⅲ. まとめ

古い芝村藩陣屋の絵図を見ると調査地点は織田藩士の恒岡直史の屋敷となっており、屋敷地の南には土塁も廻っていたようであるが、これらは確認することができなかった。周辺の調査でも陣屋建造時の整地土や廃棄土坑などの遺構は確認されるものの、屋敷に関連する区画や建物などの確認は極めて稀で、本来の陣屋の遺構は削平・改変を受けてしまったものと考えられる。(橋本)

【註記】

1) 平井良朋 1979「芝藩の変遷」『桜井市史』上巻 桜井市役所



- | | | | |
|-------------------|-------------------|--------------|----------------------------|
| 1. 暗赤褐色土 (山土) | 6. 暗褐色土 | 11. 暗褐色土 | 14. 暗灰色粘土 (やや黄色がかり、鉄斑多く含む) |
| 2. 攪乱 | 7. 暗褐色土 (やや暗い) | 12. 暗褐色砂質土 | |
| 3. 暗灰褐色土 (旧水田耕土?) | 8. 暗褐色土 (6層より明るい) | (マンガン斑多く含む) | |
| 4. 攪乱 | 9. 暗青灰色粘質土 | 13. 暗灰色砂質土 | |
| 5. 暗灰色土 (暗渠) | 10. 暗褐色粘質土 (鉄斑多い) | (6C代の土器片を含む) | |

図35 調査区平・断面図 (1/60)

第12章 山田寺跡第12次発掘調査報告

I. はじめに

山田寺跡の発掘調査は桜井市大字山田1320-3番地、字松原における農業用倉庫の建て替えに伴うものである(図36)。調査は対象建物の南部分に1×3mの小規模な東西トレンチを設定し、人力によって掘削を行ったところ寺院に関連するとみられる整地土や溝などの遺構が確認されたため、調査区の拡張を行い都合7mの調査を行っている。

II. 調査の概要

調査では表土下約50cmのところでは暗褐色土(整地土)を確認したためこの面での精査を行ったが、遺構を確認することは出来なかった。整地土内からは多くの瓦片や土師器・須恵器に混じって瓦器椀や土師皿片が少量出土しており(図39-1~4・図版19-1~4)、整地の時期は13世紀後半期のものと考えられる。

この整地土を除去し下層の調査を行ったところ、中世整地土直下において暗黄灰色の粘質土を基本とした整地土が存在しており、この面からは雨落ち溝と考えられる東西方向の溝SD-1001が1条と、大型の柱穴SP-1001を確認することが検出できた(図37・図版17、18)。以下にその概要を見てゆくこととしよう。

SD-1001 調査区の北部分において確認された東西溝である。幅は35cm前後で、検出長は約3mで

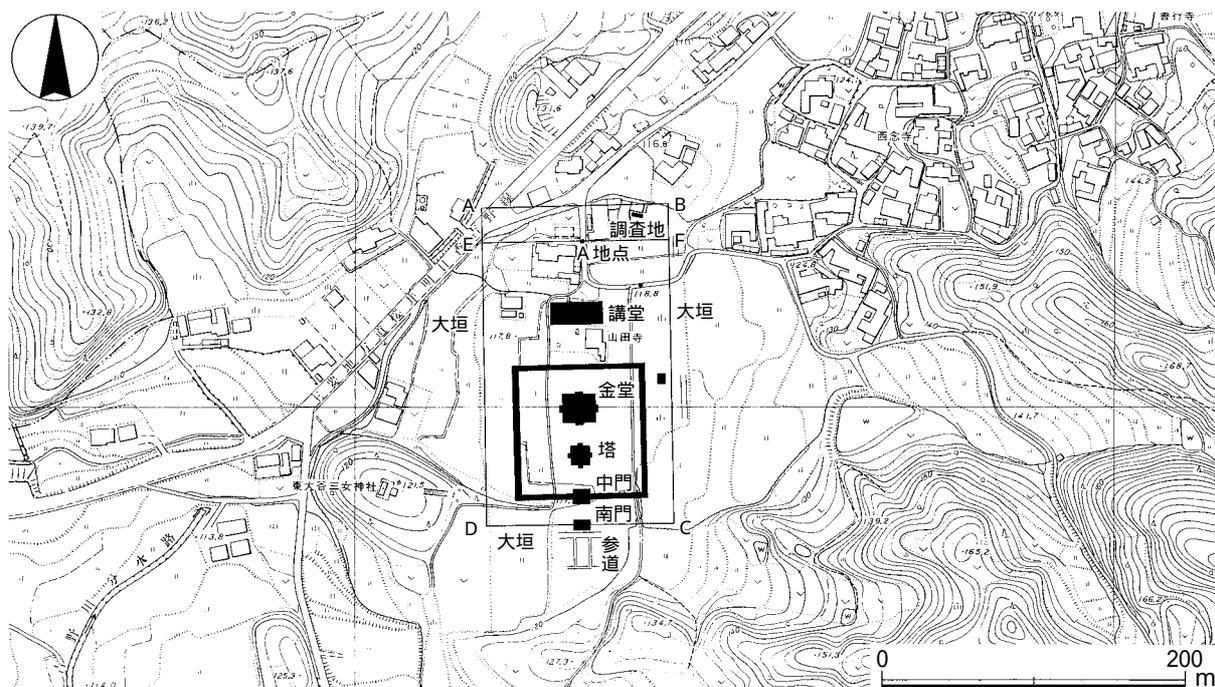


図36 山田寺第12次調査地位置図(1/5,000)

ある。深さは20cm前後で、埋土はやや褐色がかった暗灰色粘土であった。溝からの出土遺物には比較的大きな瓦片や土師器・須恵器の破片がまとまって出土しているが、いずれも口縁や底部が残存しているものは皆無で、図化することはできなかった。

SP-1001 調査区の南部分、SD-1001の南約1.2mの所で確認された柱穴である。柱穴の規模は南北約2m、東西は推定で約1.8m、深さ60cmの大型のものである。柱痕は確認できなかったが、段面の形態は浅い椀形に近いもので、埋土は3層に分けることができた。上層はマンガンの多量に沈着した暗黄褐色粘質土、中層はマンガンと黄褐色粘質土のブロックを多く含んだ暗褐色粘質土、下層は中層に同じだがやや灰色が強い暗褐色粘質土であった(図38・図版19)。

なお、遺物は中層から下層にかけて多く出土しており、図39-6~8、12・図版19-6~14に図示

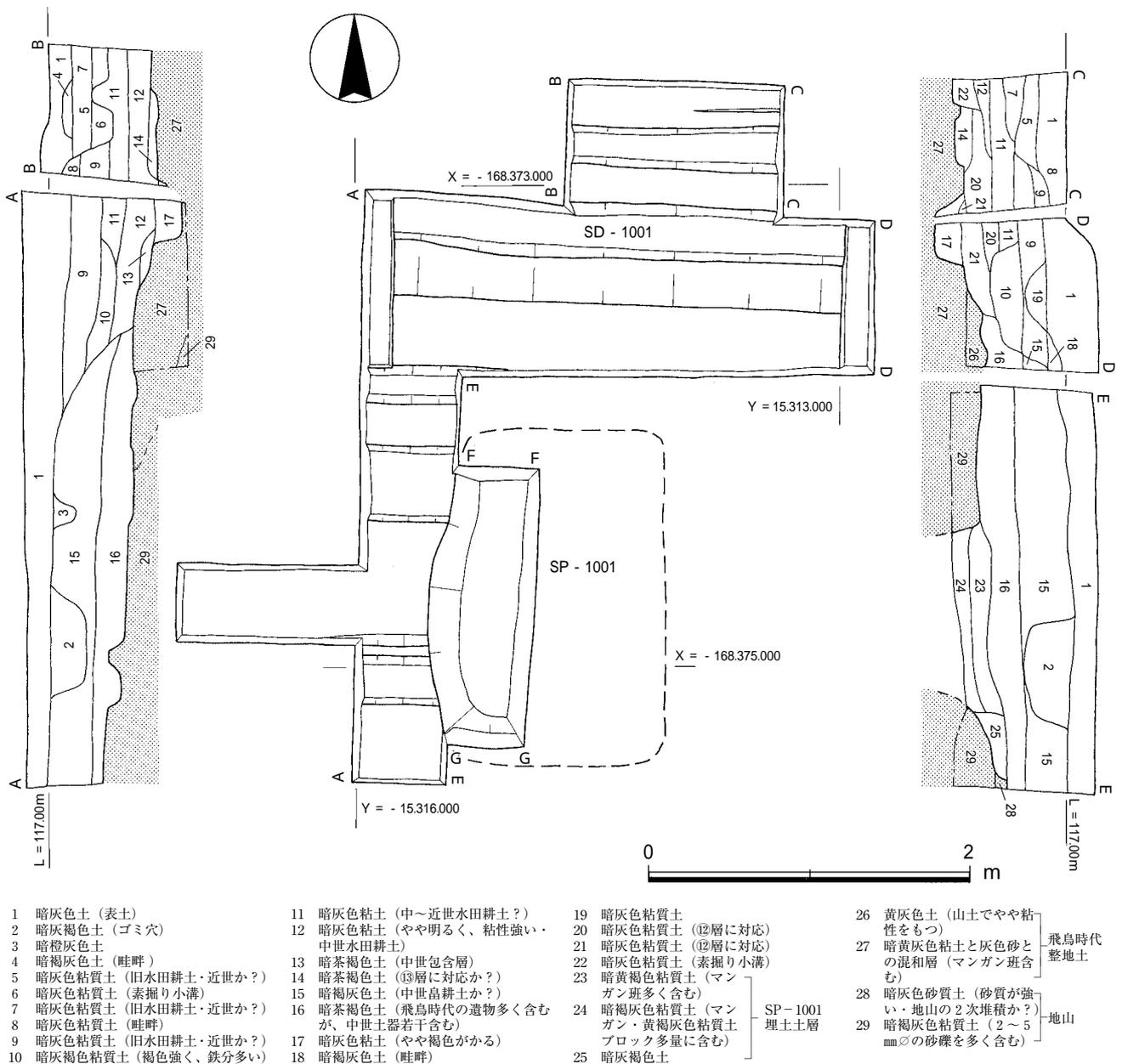


図37 調査区平・断面図(1/40)

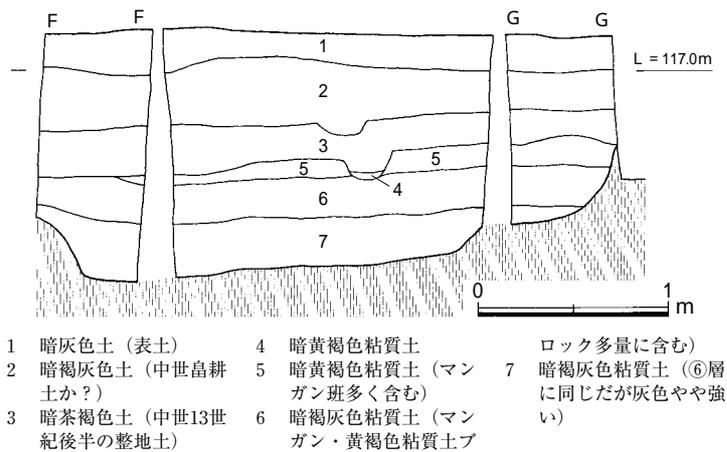


図38 SP-1001断面図 (1/40)

土によっている。一部断割り調査を行ったところ、整地土は灰色砂の混和された暗黄灰色粘土の上に黄灰色土の綺麗な土を被せて化粧を施していた事が解っている。整地土からの遺物には瓦と土師器の細片がごく少量あるのみである。

Ⅲ. まとめ

これらの遺構の性格については従来想定されていた山田寺の寺域北限より約19m外側での検出であるが、遺構の規模や時期、方位などの条件から勘案してSP-1001は寺に関連する何らかの建物の一部と考えられ、SD-1001はこの建物に付随する雨落ち溝とみられる。

遺構の性格については現時点での判断は不可能だが、伽藍との関連や柱穴の規模から寺院の生活基盤を支える施設の中心的な建物の一つと考えられる。

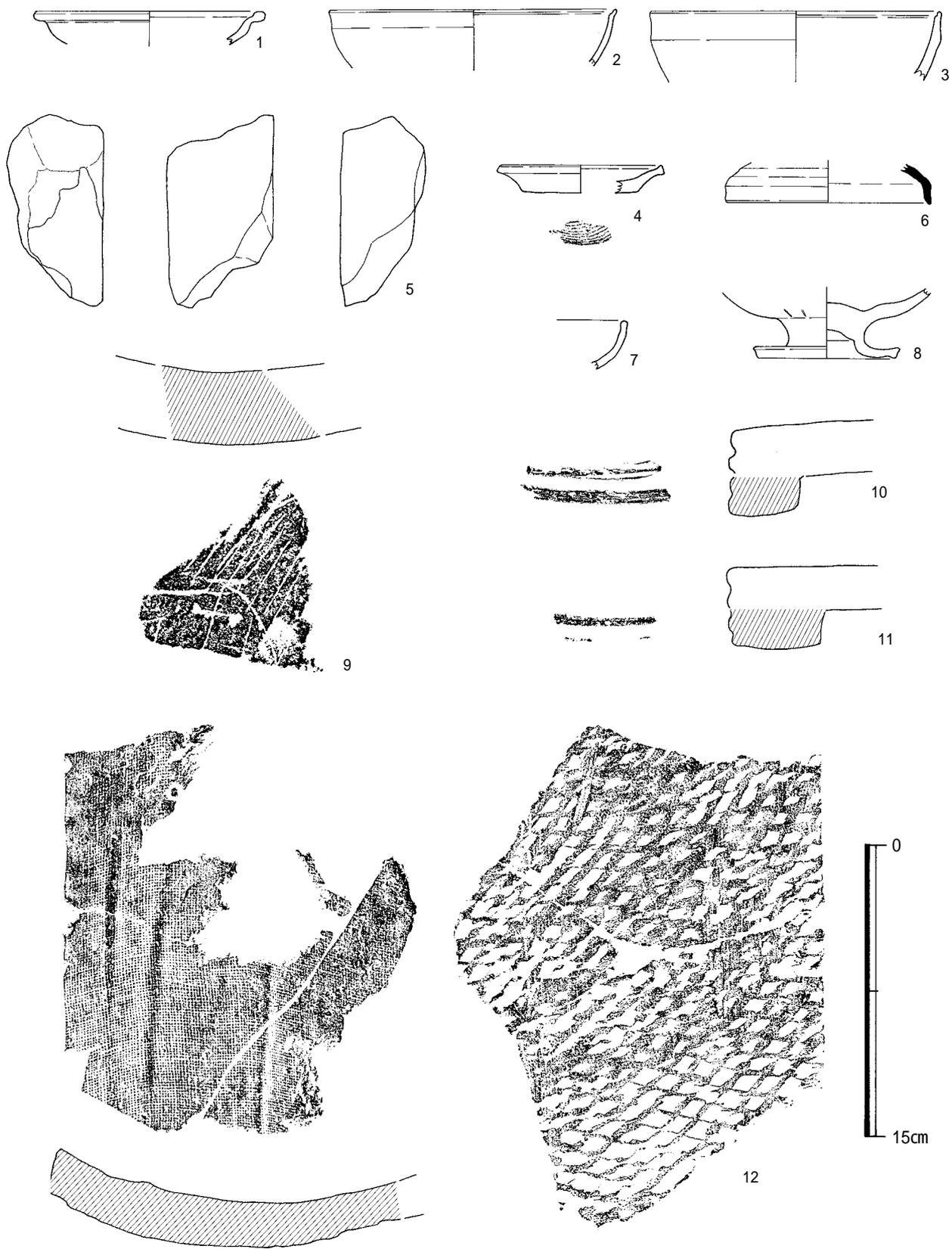
さて、図36には従来考えられていた山田寺の寺域をC D E Fの範囲で示しているが、この寺域のラインについては第6次調査概報でも指摘されているとおり、基本的には中心伽藍が占地する平坦地を区画するものとするが、第6次調査で確認されている北東隅の柱列は調査面積の矮小さから必ずしもここで隅とは言い切れない可能性も残る。第6次調査地と今回の調査地との比高差は約1.3mあるものの、F EラインとD Eラインの西面で確認されている柱列との比高差もほぼ同一であることや、今回の建物と西面柱列のレベルがほぼ同一であることなどから、柱列がA B C Dのラインで廻る可能性があることにも留意しておきたい。いずれにせよ、第4・12次調査で確認されたとおり、従来の推定区画の北・東側にも寺院関連施設が展開していることは明らかとなり、他の付属施設をも含めた広義の寺域はさらに広がる事となった。ただし、北限については第12次調査地の北側には一段低い谷地形が存在しているためA Bラインを超えることは無く、南北の寺域は従来想定されていた187mから210m近くにまで広がる事となろう。(橋本)

【註記】

- 1) 奈良国立文化財研究所 1985「IV山田寺第6次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』
- 2) 奈良国立文化財研究所 1983「6. 山田寺第4次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』

したもの以外に、瓦片や土師器・須恵器の破片が比較的まとまって出土しているが、口縁や底部が残存しているものが少なく、図化でき得るものは少なかった。

下層整地土 SD-1001・SP-1001の基盤面は本来の北へと下っていく自然地形に整地をかけて平坦面を確保したものであり、平面では南端部分でのみ地山が確認できるものの、他はすべて盛



1~5 16層出土 6~8·12 SP-1001 9~11 覆土一括

图39 出土遺物実測図 (1/3)

第13章 纏向遺跡第127次発掘調査報告

I. はじめに

纏向遺跡第127次調査は纏向遺跡の範囲確認調査として従来あまり調査の手が入っていなかった巻野内地区において調査を行う事となった。調査地は桜井市大字巻野内93番地の巻野内石塚古墳の東側隣接地を選定し、地主寫岡一郎氏の全面的な御協力のもとに南北20m×東西5mトレンチを設定、3月5日から19日にかけて調査を行う事ができた(図40・図版20)。

調査はバックホーによって掘削を行ったところ、表土下約60cmの地点で暗橙灰色土と暗褐色砂礫を基本とした地山が確認されたため、この面までを一気に露呈させ、遺構の調査を行っている。

II. 調査の概要

調査区の基本層序は上層よりI層 暗灰色土(水田耕土)、II層 暗青灰色土(水田耕土)、III層 暗橙灰色土(床土)、IV層 暗灰色砂質土(中世水田耕土?)、V層 暗橙灰色土(地山)であった。

遺構面を精査・検出を行った結果、当初期待された古墳時代前期の遺構や巻野内石塚古墳に関連する周濠などは確認することはできず、中世から近世にかけてのものと考えられる素掘り小溝が12条と古墳時代中期の落ち込み(SX-1001)が確認されたのみであった(図41・図版21、22)。

SX-1001は調査区外へと広がっていくため規模などは不明だが、埋土は上部が黒褐色土、下部は暗灰色粗砂で埋没している。遺構の深さは20cm前後で、下層の粗砂や遺構底面の抉れから洪水などの一時的な水の流れがあったことが推定できる。この遺構からの出土遺物には古式土師器の小片の他に須

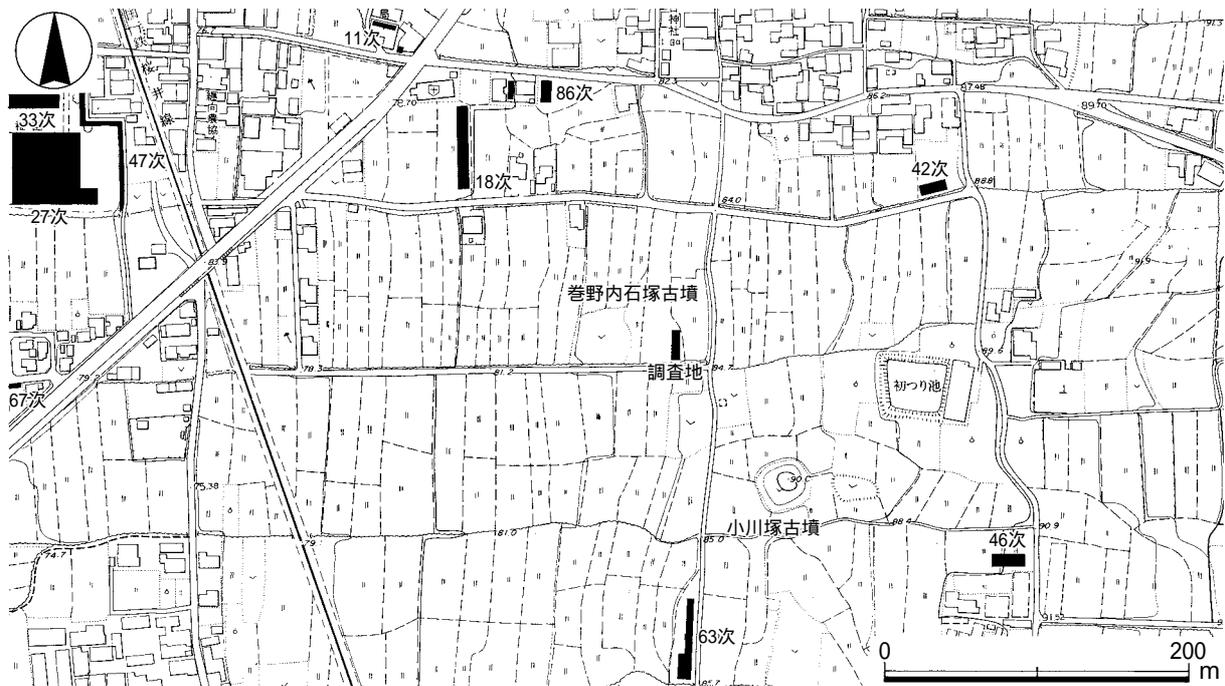
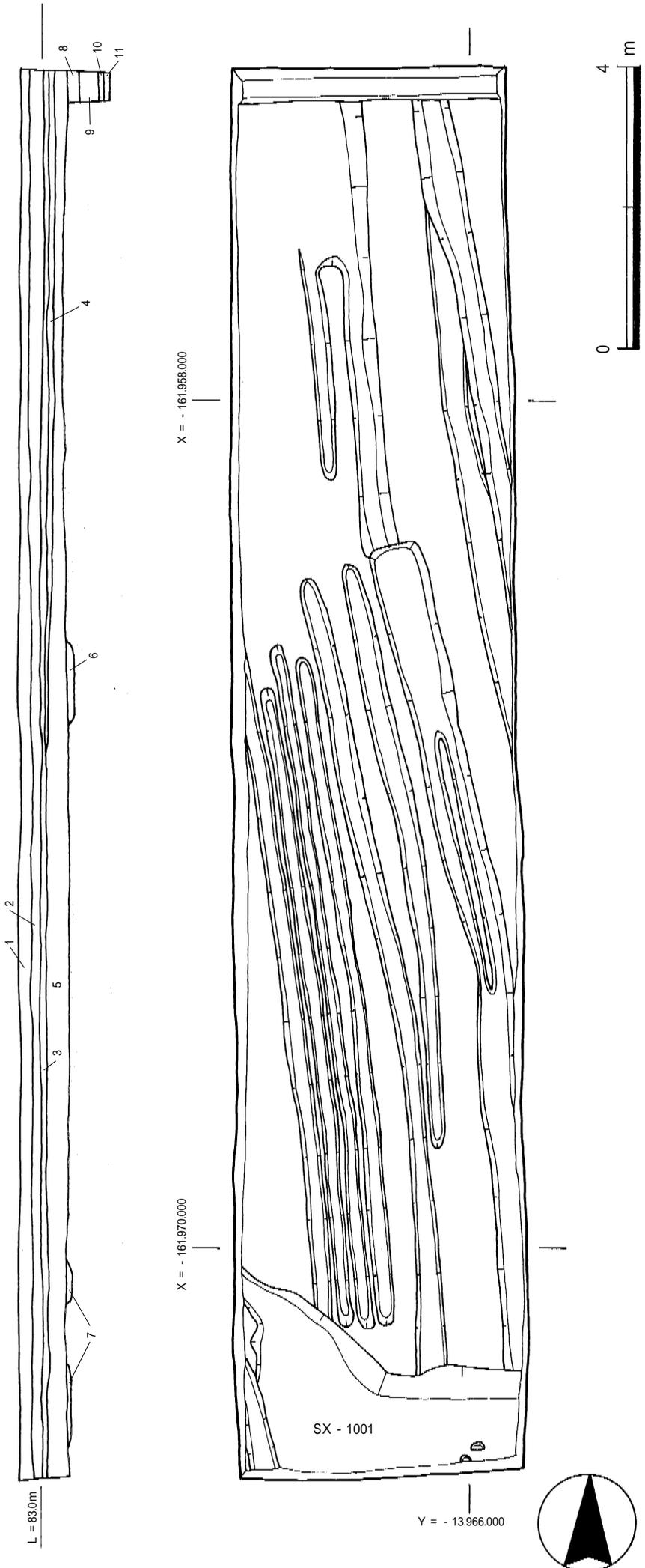


図40 纏向遺跡第127次調査地位置図 (1/5,000)



- 1 暗灰色土 (水田耕土)
- 2 暗青灰色土 (水田耕土)
- 3 暗橙褐色土 (庄土)
- 4 暗褐灰色土 (庄土・マンガン多量に含む)
- 5 暗灰色砂質土 (中世水田耕土?)
- 6 暗灰色砂質土 (素掘り小滞埋土)
- 7 黒褐色土 (SX-100埋土)
- 8 暗橙灰色土 (3~5mmの砂礫多く含む)
- 9 暗橙灰色土 (⑧層より粘性あり、暗くきめ細かい)
- 10 暗橙灰色砂礫
- 11 暗橙灰色砂
- 12 暗橙灰色礫 (5mmの礫で構成され、2~3cmの礫を多く含む)

図41 調査区平・断面図 (1/80)

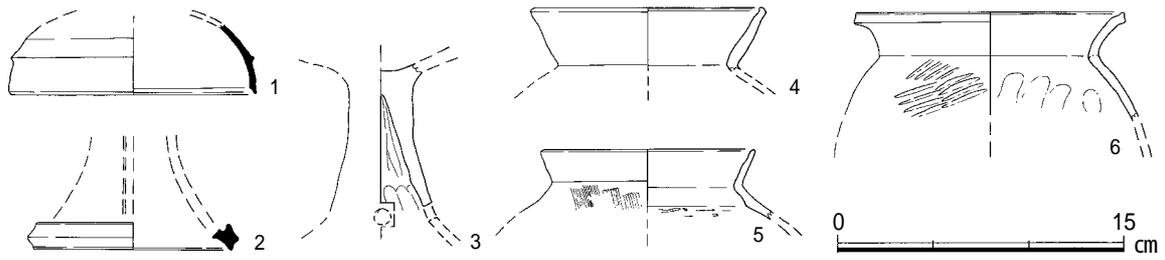


図42 SX-1001出土土器実測図 (1/4)

恵器坏蓋と高坏・大甕の小片がある (図42・図版22-4~8)。概ね6世紀前半頃のものと考えられよう。

Ⅲ. 巻野内石塚古墳の測量調査

従来、巻野内石塚古墳に関しては径40m程度の後期の円墳とする考えが一般的であったが、北側の果樹畑の部分が北側へと不自然な張り出しを持つことから、前方後円墳となる可能性も指摘されていたため、一部の関係者の間では早くから注意されていた古墳である¹⁾。

今回、墳丘周辺の発掘調査を実施するにあたり、基礎的なデータを得るために墳丘測量図を作成する事とした (図45)。なお、作成した原図の縮尺は1/100で、25cmコンターで等高線を示している。

測量の結果、墳丘は径約40m程度の円丘部に北東方向へと前方部が取り付く前方後円墳になるものと考えられる。墳丘を観察すると後円部の東側は綺麗な円を描いているのに対し、北側と西側は殆どが後世の開発により直線的にカットされてしまっている。後円部西側では唯一本来の形状に近いと考えられるクビレ部から後円部にかけてのラインも直線的で、北西へと少し膨らんでいるが、これが墳丘からの引き落としであるのか、或いは本来の墳丘が削られた結果なのかについては判然としない。

仮に本来の墳丘がもう少し大きくてこれをカットした結果、この様な形状になったとすれば、クビレ部の位置が東西で若干ずれる事も合わせて後円部は東側に比べて西側が膨れた少しびつな形状であったのかもしれない。

前方部の長さは北側に残る水田の畦畔から推定することができる。西側の畦畔は後世の改変によって直線的なものに変えられてしまっているが、東面の水田の畦畔はクビレ部から北東方向へとスムーズに開いた後、クビレ部より約20mの地点で西へと屈曲を変えている。この屈曲点を前方部のコーナーと考えれば前方部の長さは約20mとなり、全長は約60mに復元することができよう (図43)。

これから復元されるクビレ部の幅は約16mで、後円部の高さは東側水田からは約4m、西側水田からは約6m、前方部との比高は3.5mと著しく前方部が低いものとなる。段築については後世の畑耕作による改変が著しく判然としな

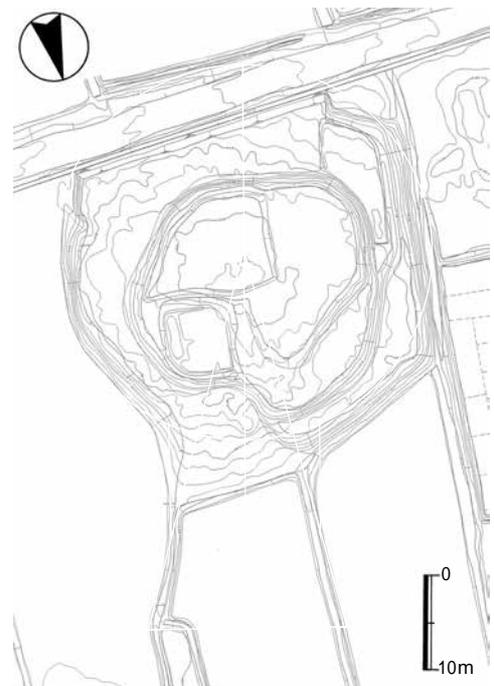


図43 墳丘復元案 (1/800)

いが、後円部北東部の一部には本来の段築の存在を推定させる部分も残ることや、段部分と墳丘の高さの比率などから勘案して本来は3段の段築を有していたものと推定できる。

以上、現地での観察と測量図をもとに墳丘を概観したが、墳頂部が一定の改変を受けていると考えられるにも拘わらず横穴式石室の石室材が認められず、必ずしも後期にまで下る根拠が無いことや、全長と後円部・前方部の比率が3：2：1の比率を持つこと、前方部が著しく低いことなど、先述した墳丘の築造企画の諸要素がいわゆる纏向型前方後円墳²⁾の企画と合致してくることは興味深い。

この古墳を纏向型前方後円墳と仮定して考えると、墳丘上には本来葺石に由来するとみられる多くの石材が石垣に利用されていることは古墳の系譜を考える上で手がかりとなるであろう。

纏向遺跡における纏向型前方後円墳のうち、葺石を有するものはホケノ山古墳だけであるが³⁾、両古墳が直線距離で300mしか離れていない事や、他の古墳とは異なり遺跡内でも東の高い地域に築かれている事、墳丘の企画に近い形態を持つ事(図44)など、共通点が多く巻野内石塚古墳の築造はホケノ山古墳と相前後するころのものである可能性が出てきたことは特筆されよう。

なお、周濠に関しては今回の調査地が墳丘から若干離れすぎたため確認することができなかったが、他の纏向の諸古墳と同様に幅10~20m前後の周濠あるいは掘割りが存在する可能性も高いと思われる。今後の継続した範囲確認調査に期待したい。(橋本)

【註記】

- 1) 1991年の寺澤薫氏と筆者らによる踏査時の寺澤薫氏の所見。
- 2) 寺澤薫1988「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学
- 3) 河上邦彦ほか2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社

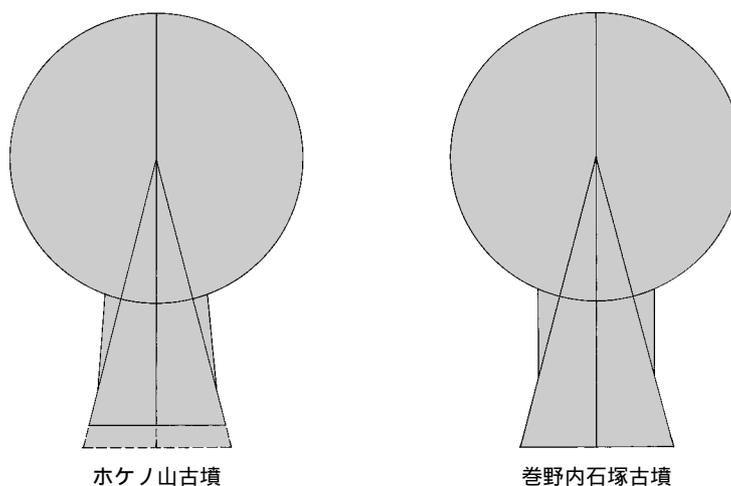


図44 ホケノ山古墳と巻野内石塚古墳との墳丘比較
※スケールは不同

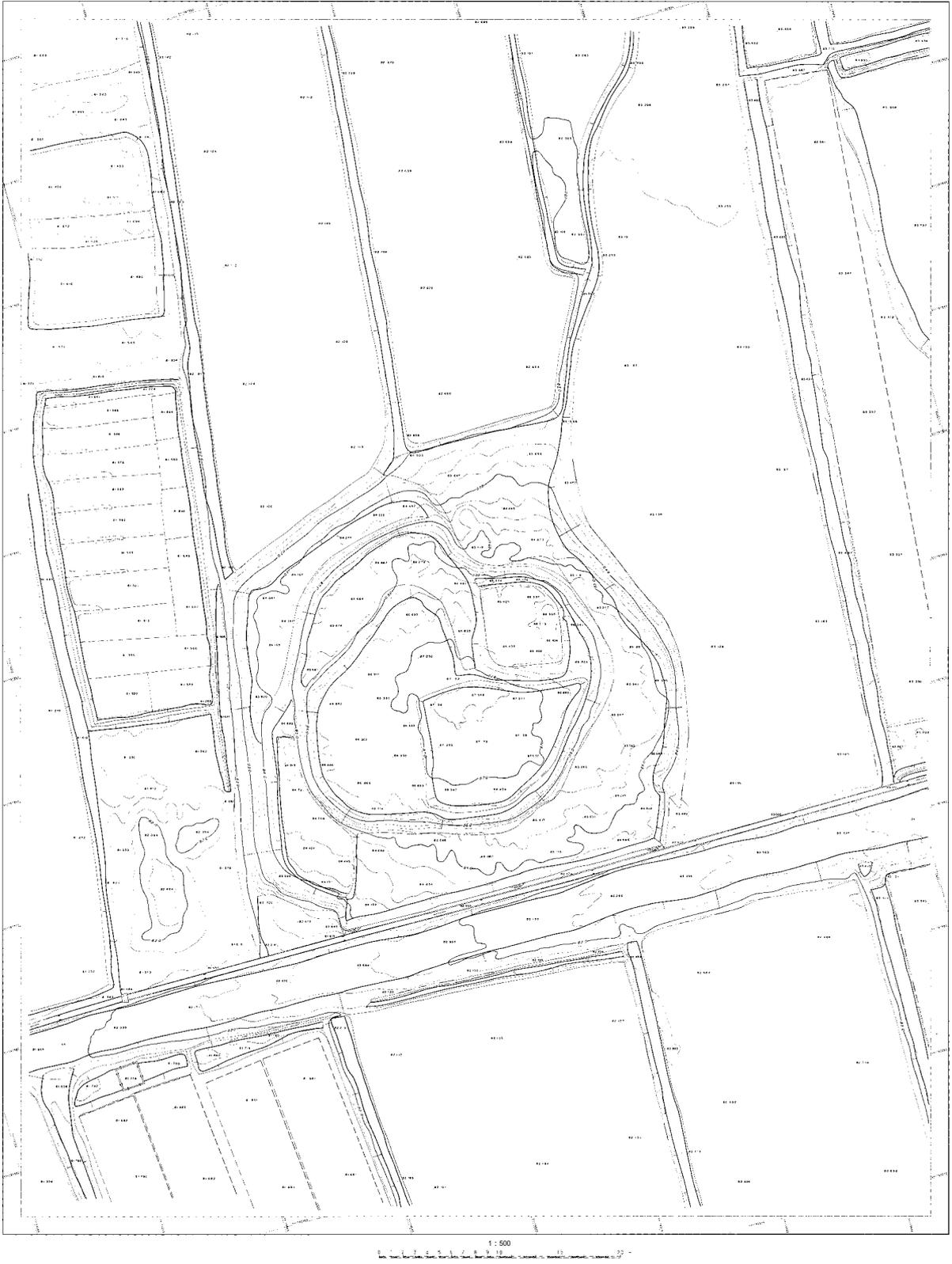


图45 卷野内石塚古墳墳丘図 (1/500)

れ、中段には斜め方向のケズリA、上段には右上がりのケズリAの後、スリナデI Aaが施されている。

高坏の脚4は穿孔より下が欠損しているが、屈曲点なく円錐形に広がるタイプの脚になるものと考えられる。表面には整形時のものと考えられる縦方向のスリナデI Aaが認められるが、表面の摩滅が進んでおり、最終調整は不明である。

高坏の脚5は裾の半分が欠損しており、現状では穿孔が2ヵ所に認められるが、その配置から本来四方穿孔であったと推察される。調整は脚部外面には横位のミガキAがみられ、脚柱部内面には成形時の絞り痕が明瞭である。

Ⅲ. まとめ

これらの遺物については出土状況が判然としないものの、同一の砂層より出土したとの採集者の御教示から比較的まとまりのある資料と考えたい。遺物点数の少なさなどもあるが、時期については高坏5がB型式のもので、脚部に明瞭な屈曲を有することや、二重口縁壺1が無紋で直立する頸部をもち、体部の球形化が進んでいること、甕3がタタキの後、縦方向のスリナデI Aaを施していることなど、いずれの資料も比較的新しい様相を具備することから勘案して布留0式期のものと考えたい。

今回の発見により従来確認されていなかった地域において3世紀に遡る遺構の存在が確認されたことは重要である。発掘調査とは違い、まだ点としての情報にしかすぎないが、今後とも市内の些細な動向に対応しながら検討を進めていきたい。(小畑)

【註記】

- 1) 寺沢薫編 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第四十九冊 奈良県立橿原考古学研究所
以下、本報告における土器の調整技法・編年観はこれに準拠する。

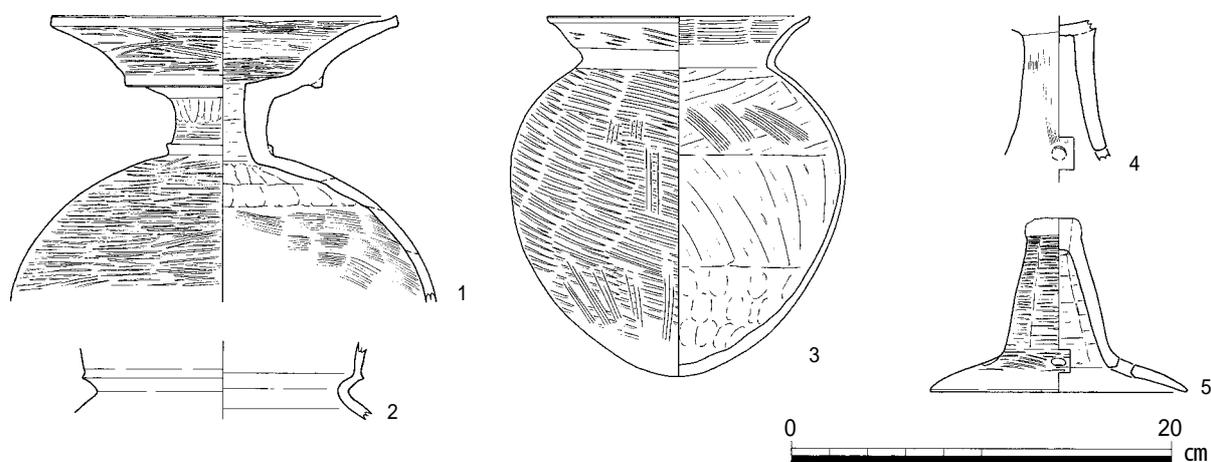


図47 出土遺物実測図 (1/4)

付載 2 旧桜井市立図書館収蔵の瓦について

ここに紹介する瓦類はかつて桜井市立図書館において保管されていたもので、工事に際して出土したものや、市民からの寄贈品などが含まれている。資料は平成元年の埋蔵文化財センターのオープンに際して図書館から移管された物で、市内出土品に限らない多くの瓦や土器・鉄器が含まれている。

今回、山田寺跡の調査を行った際に地主である岩本氏より寄贈頂いた山田寺跡出土の軒丸瓦片と鴟尾片を紹介するにあたり、合わせて図書館旧蔵資料のうち飛鳥～藤原京期の瓦類について紹介しておくこととしたい。

粟原寺跡出土資料 1から6は瓦の型式より粟原寺跡出土と考えられるものである。2のみが裏面に粟原寺との墨書きされた和紙が貼り付けられているが、他の資料には明確な出土地を示す記載がない。3の背面には「勝井氏」と書かれた紙が貼られている。また、4の背面には「安小」（安倍小学校の意味と考えられる）と書かれた紙が貼られている。6の平瓦にも何かを記載していたとみられる紙の貼り付けた跡があるが、文字は確認できない。

山田寺跡出土資料 7の鴟尾と10の軒丸瓦は岩本氏よりの寄贈資料である。軒丸瓦の出土地点は不明だが、鴟尾は寺域の北東隅付近の小川で採集したものとのことである。8は明確な出土地を示す記載がない。裏面に「勝井氏出品」とあり、9も裏面には「勝井氏」と紙が貼られており、その横には山田寺とかすかに墨書が読み取れる。11には「磯城郡安倍村山田 山田寺」と墨書が明瞭である。

安倍寺跡出土資料 12・13は型式から安倍寺出土と考えられるものである。12には「勝井氏」と書かれた紙が貼り付けられている。13には何もない。

吉備池廃寺出土資料 14には「安小」と書かれた紙が貼り付けられている。型式から吉備池廃寺出土と考えられる。

上宮寺跡出土資料 15には背面に「昭46.5桜井市高田堂垣内出土上宮寺古瓦」と墨書がされている。

大福小学校出土資料 16は昭和46年前後に大福小学校の砂場を作る時の掘削に際して出土したものであるとのことである。型式から藤原京に関連するものと考えられる。

青木廃寺出土資料 18・19は桜井市職員による青木廃寺採集の鬼瓦片である。

川原寺跡出土資料 20は「山田寺古瓦 南小学校」と書かれた紙が貼り付けられているが、山田寺出土資料にはこの形式の瓦は含まれていないことから、恐らく川原寺出土資料と考えられる。

大官大寺出土資料 22は型式（6661B）からは大官大寺出土品と考えられる。

出土地不詳資料 17・21・22があるが、21は形式的には6647Dに近いが、下部には圏線が存在しない。藤原宮域で出土したものであろう。17については詳細は不明である。

以上、各資料に残されている記載や瓦当の型式から出土地を探ってみた。各資料の認識については筆者の浅学のせいで多くの過ちや誤認があるかもしれないが、センターに死蔵されていた資料を紹介できたことで一応の責任を果たすこととしたい。残る中世瓦やその他の資料についても今後の報告の中で機会があれば随時紹介していく予定である。

（橋本）

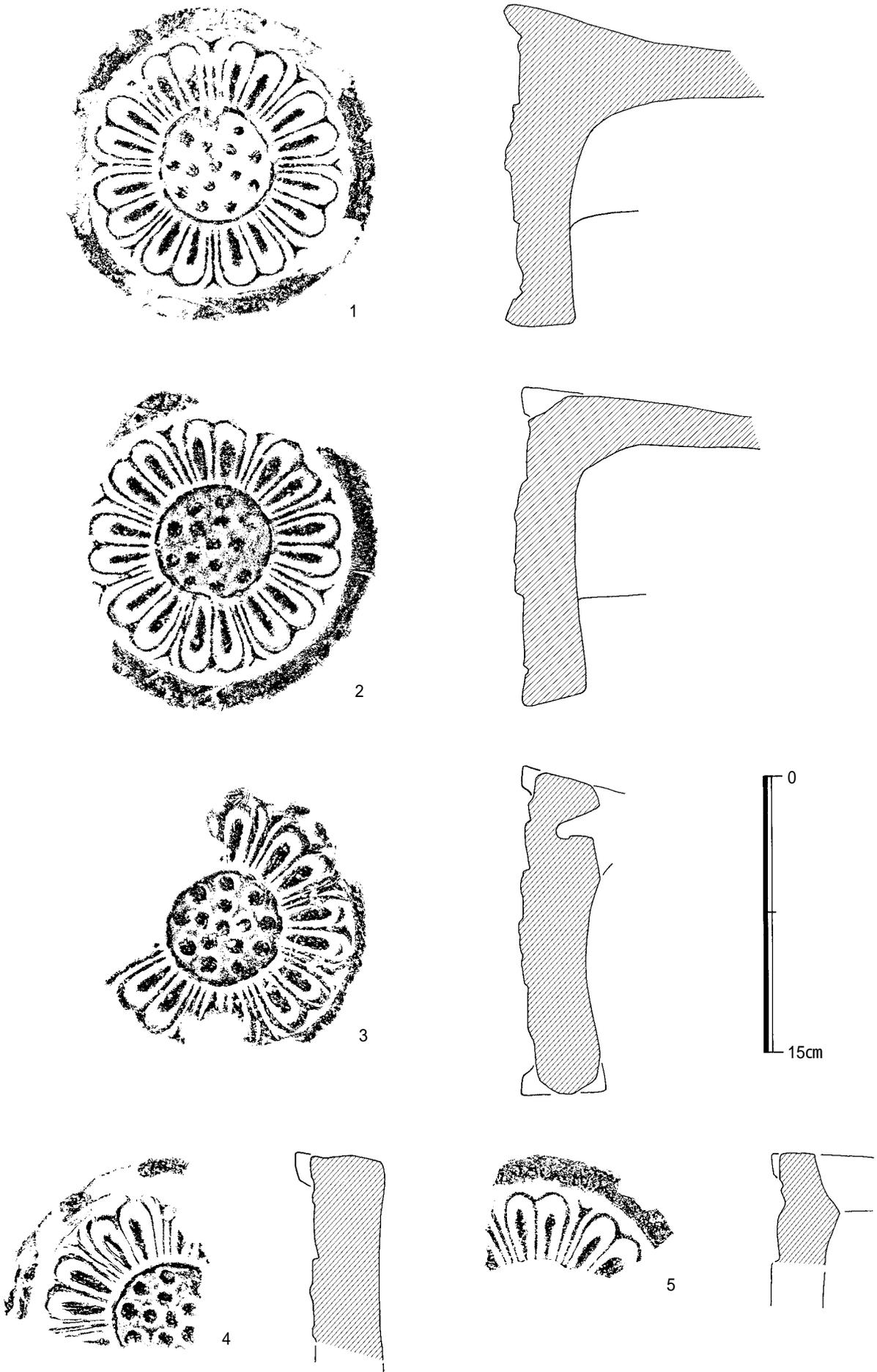
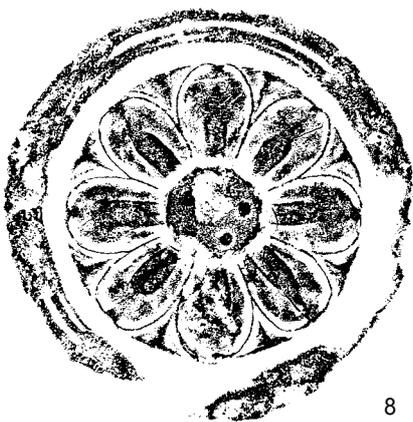
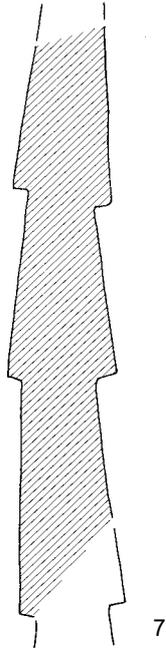
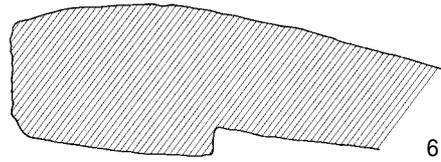
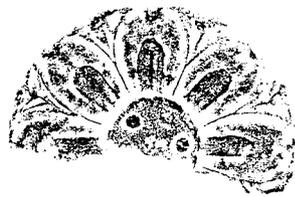
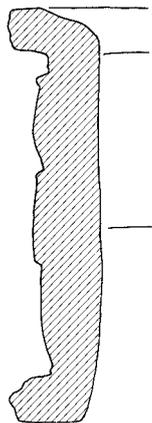


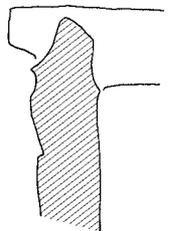
图48 旧図書館収蔵瓦実測図(1) 1 : 3



8



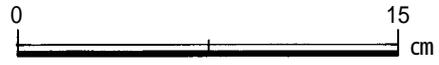
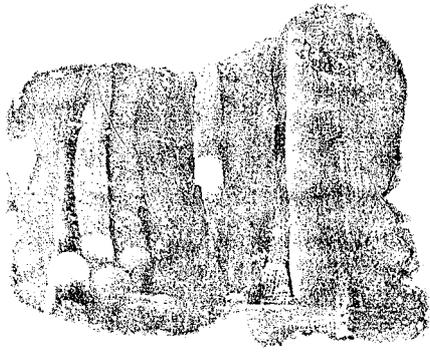
9



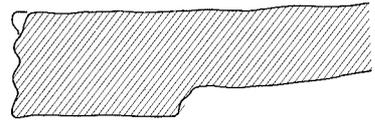
10



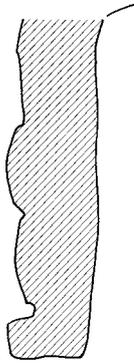
图49 旧图书馆收藏瓦实测图(2) 1 : 3



11



12



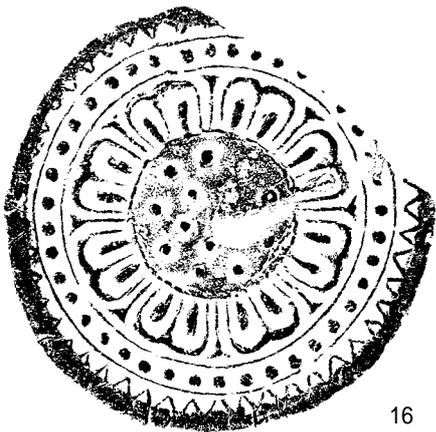
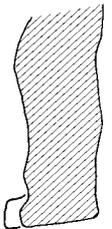
13



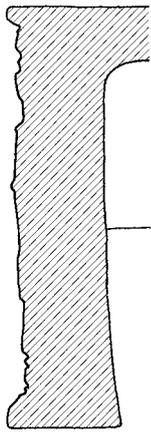
14



15



16



17

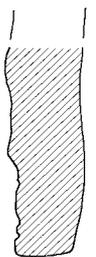


图50 旧图书馆收藏瓦实测图(3) 1 : 3

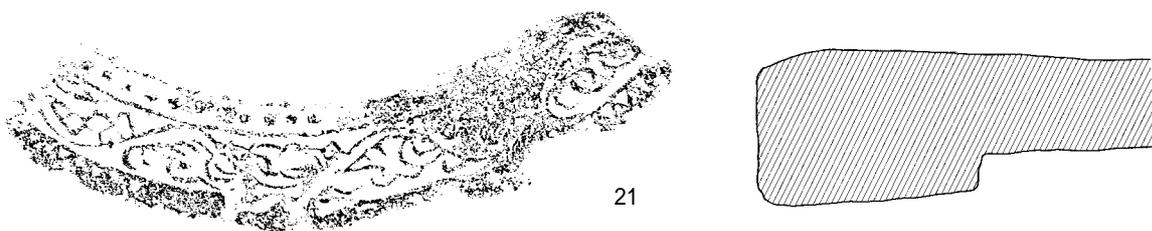
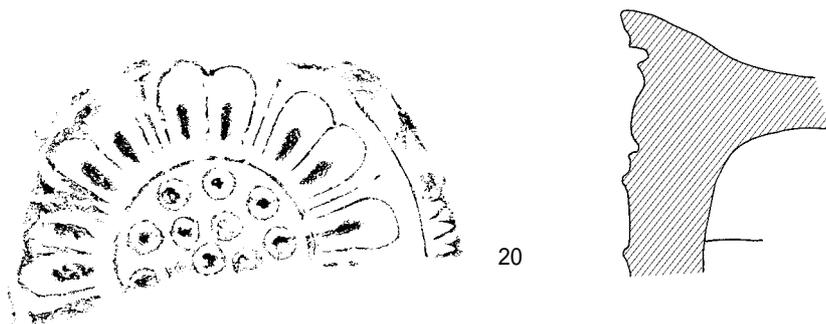
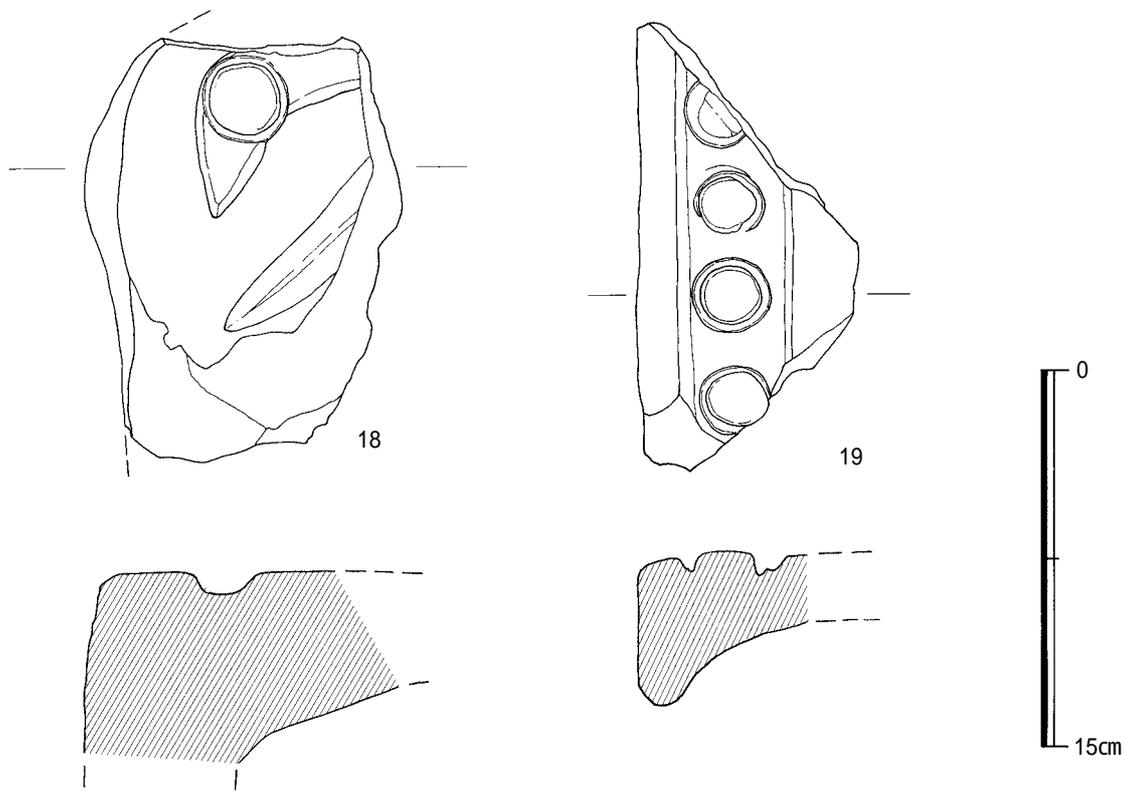


图51 旧图书馆收藏瓦实测图(4) 1 : 3

報告書抄録

書名	桜井市平成13年度国庫補助による発掘調査報告書		
副書名			
巻次			
シリーズ名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書		
シリーズ番号	第23集		
編著者名	橋本輝彦 松宮昌樹 小畑佳子		
編集機関	桜井市教育委員会（市立埋蔵文化財センター）		
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366		
発行年月日	2002年3月31日		

所収遺跡名	所在	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東新堂遺跡 第8次	桜井市 東新堂356-1	292061	14-B-8	34° 31′06″	135° 50′05″	20010423～ 20010518	136㎡	個人住宅建築 に伴う調査
大藤原京関連遺跡 第36次	桜井市 橋本91-2	〃		34° 29′55″	135° 50′17″	20010528～ 20010601	31㎡	〃
朝倉遺跡 第4次	桜井市 黒崎320-3	〃	15-A-247	34° 31′09″	135° 52′51″	20010615	3㎡	〃
吉備池遺跡 第12次	桜井市 橋本51-1	〃	14-B-24	34° 30′03″	135° 50′14″	20010711～ 20010724	125㎡	範囲確認調査
纏向遺跡 第123次	桜井市 箸中935-3他	〃	11-D-487	34° 32′02″	135° 50′12″	20010730～ 20010803	14㎡	個人住宅建築 に伴う調査
三輪遺跡 第19次	桜井市 三輪159-1	〃	14-B-14	34° 31′23″	135° 51′21″	20010823～ 20010829	40㎡	〃
纏向遺跡 第124次	桜井市 東田198-1	〃	11-D-487	34° 32′28″	135° 50′02″	20010917～ 20010920	25㎡	〃
吉備遺跡 第14次	桜井市 吉備369-3	〃	14-B-22	34° 30′13″	135° 50′06″	20010921～ 20010927	30㎡	〃
上之宮遺跡 第14次	桜井市 上之宮391	〃	14-B-70	34° 29′53″	135° 51′07″	20011002～ 20011003	13㎡	〃
茅原遺跡 第11次	桜井市 芝1158-1	〃	11-D-546	34° 31′53″	135° 50′48″	20020225～ 20020226	22㎡	〃
山田寺跡 第12次	桜井市 山田1320-3他	〃	14-D-76	34° 28′49″	135° 50′02″	20020212～ 20020215	7㎡	〃
纏向遺跡 第127次	桜井市 巻野内93	〃	11-D-487	34° 32′25″	135° 50′48″	20020305～ 20020319	80㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
東新堂遺跡第8次	集落遺跡	掘立柱建物・土壙墓	瓦器碗・土師皿	
大藤原京関連遺跡第36次	集落遺跡			
朝倉遺跡第4次	集落遺跡			
吉備池遺跡第12次	集落遺跡	建物・雨落溝	瓦・須恵器・土師器	吉備池廃寺南門を確認
纏向遺跡第123次	集落遺跡	溝・落ち込み		
三輪遺跡第19次	集落遺跡	中世溝・柱穴・土塁		中世三輪城の土塁
纏向遺跡第124次	集落遺跡	後期古墳周濠	須恵器	埋没した後期古墳
吉備遺跡第14次	集落遺跡			
上之宮遺跡第14次	集落遺跡			
茅原遺跡第11次	集落遺跡	落ち込み	須恵器	
山田寺跡第12次	集落遺跡	建物・雨落溝	瓦・須恵器・土師器	山田寺の寺域を確認
纏向遺跡第127次	集落遺跡	落ち込み	須恵器・土師器	



調査地全景 - 1 (南より)



調査地全景 - 2 (南より)



調査地全景-3 (南より)



土壙墓SK-1001 (北より)



西壁断面（東より）



西壁断面（南東より）





第1面全景（北より）



第2面全景（北より）



調査地全景 (南より)



トレンチ全景 (右が北)



トレンチ全景 (北より)



トレンチ全景 (南より)



北面雨落溝（西より）



南面雨落溝（東より）



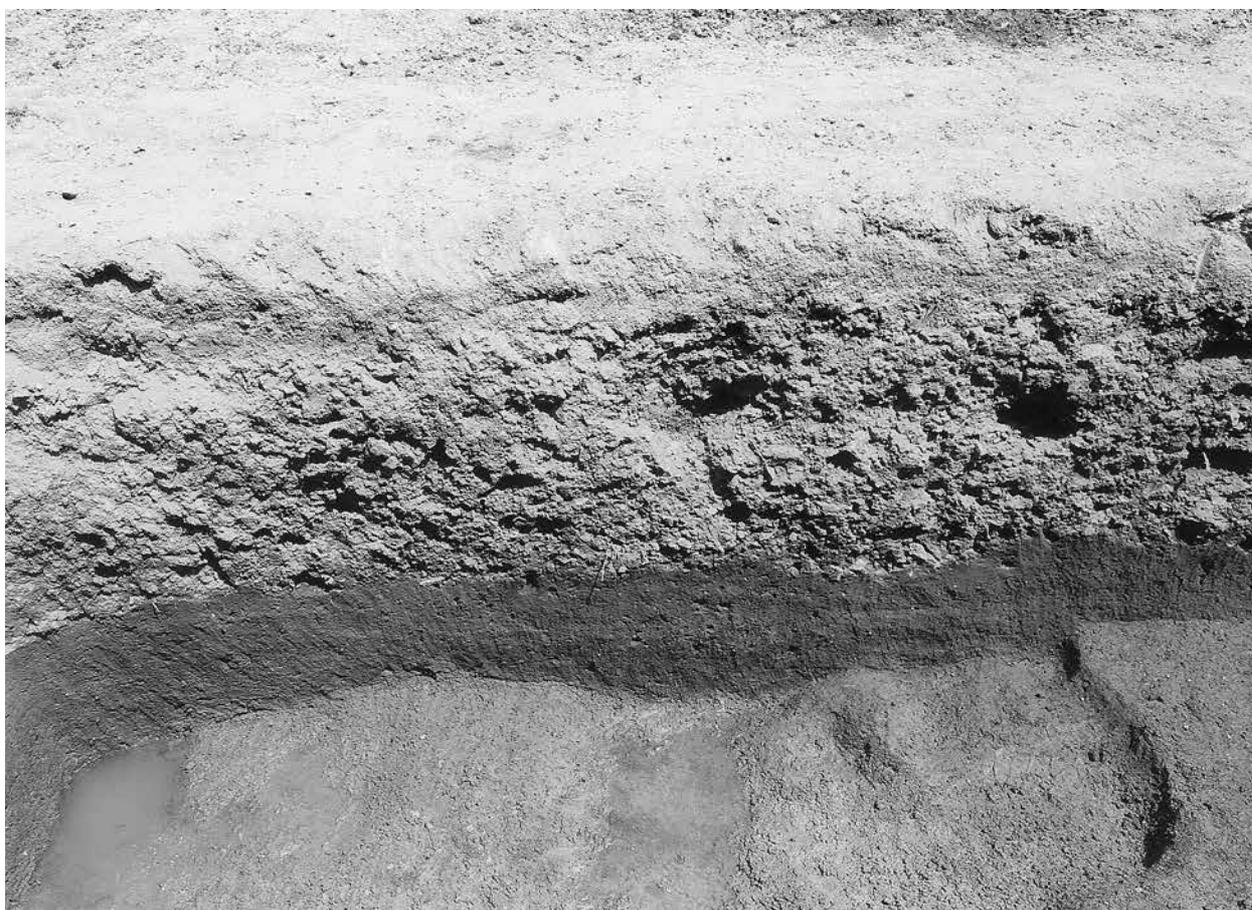
南門全景（南東より）



基壇状の高まり（東南より）



調査地全景（西より）



北壁断面（南より）



調査地全景-1 (西より)



調査地全景-2 (東南より)



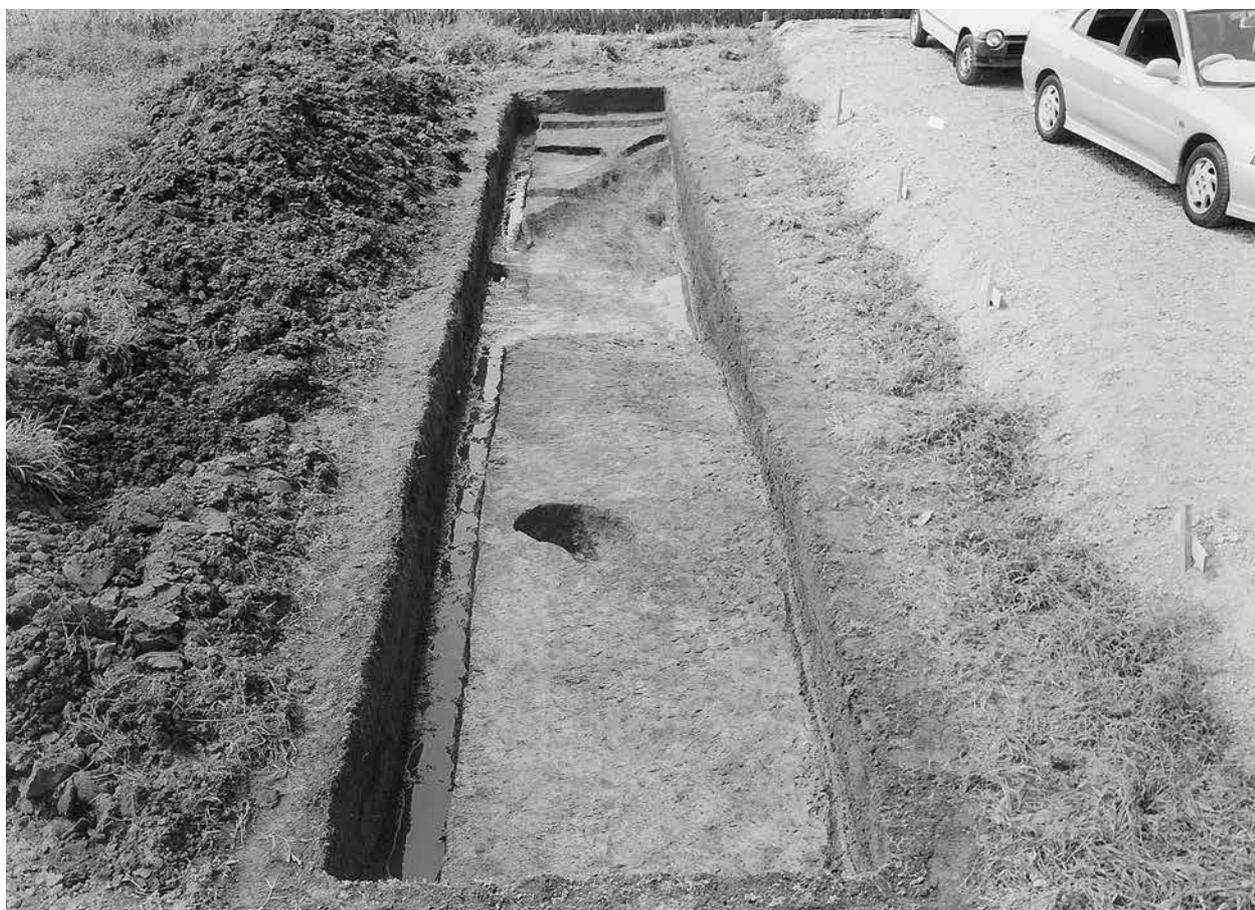
SD-1001南壁断面



出土遺物 4・6 SD-1001 3 SD-1002 1・2・5・7 SD-1003



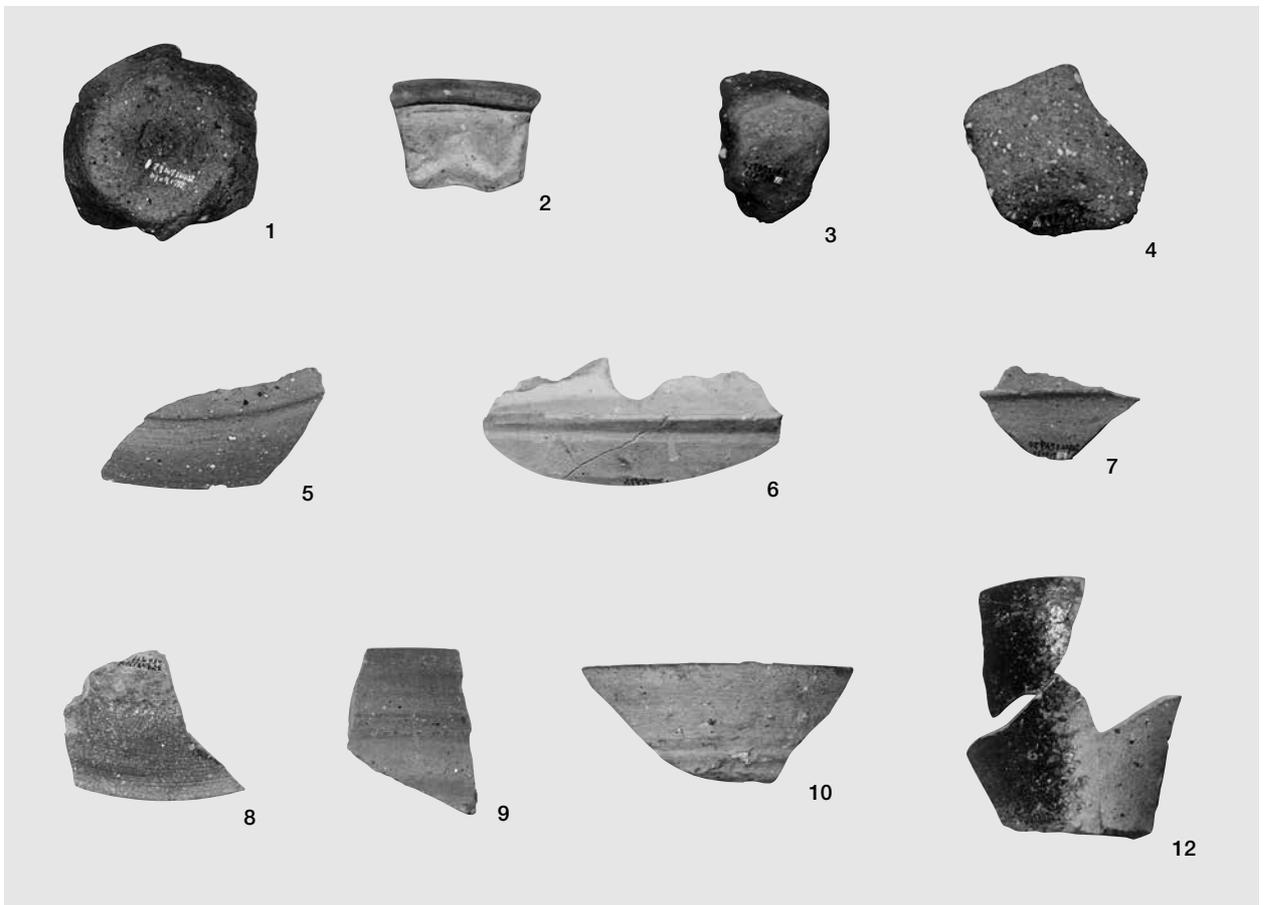
調査地全景（西より）



調査地全景（東より）



SX-1001全景 (南西より)



出土遺物 1 覆土一括 2~11 SX-1001



調査地全景（西より）



北壁断面（南東より）



調査地全景（東より）



下層探査トレンチ（南より）



調査地全景（東北より）



調査地全景（東より）



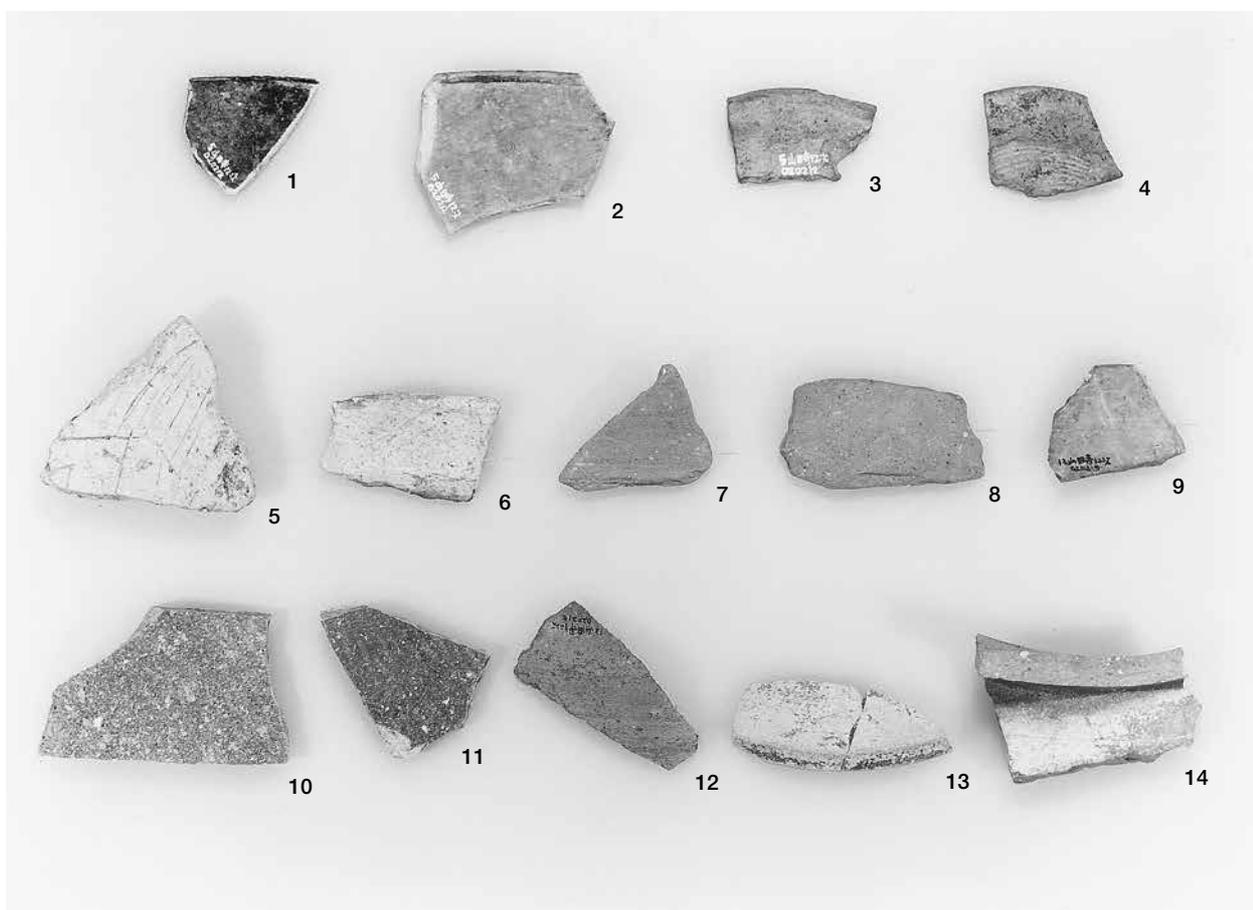
調査地全景（西より）



西壁断面



SP-1001 (西より)



出土遺物 1~4 中世整地土 5 覆土 6~14 SP-1001



調査地と巻野内石塚古墳（下が北）



調査地と巻野内石塚古墳（右が北）



調査地全景 (右が北)



調査地全景 (南より)



SX-1001全景(東北より)



出土遺物 1～3 茅原遺跡第11次古墳時代包含層
4～8 纏向遺跡第127次SX-1001



出土地遠景（北西より）



出土遺物

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 23集

桜井市

平成13年度国庫補助による
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会
桜井市立埋蔵文化財センター

〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2番地

/ 0744-42-6005

; 0744-42-1366

年月日 平成14年3月31日

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464